

熊取町埋蔵文化財調査報告書第50集

野田遺跡I・東円寺跡XII発掘調査報告書

平成22年10月

熊取町教育委員会

## は し が き

熊取は泉南地域の市町村の中で中世以来今日まで領域と地名がほとんど変化していない町で、町内には重要文化財の中家住宅や降井家書院など江戸時代初期頃の文化財をはじめ、他に43ヵ所を数える埋蔵文化財包蔵地があり、貴重な遺構や遺物が埋蔵されています。

熊取町教育委員会は皆様のご協力とご理解を得ながら、毎年数十件程の緊急発掘調査を実施しています。この二十数年埋蔵文化財発掘調査を実施し続けて多くの資料を得てきました。

本書は平成19年度に熊取町野田の住宅地造成工事に伴って実施した発掘調査（野田遺跡07-5区）と、平成21年度の熊取町野田の店舗建設工事に伴う発掘調査（東円寺跡09-1区）の報告書として作成したものです。今後多方面の研究に役立てられることを願っています。

最後になりましたが、本年現地での発掘調査にあたってご協力をいただきました土地所有者ならびに関係者各位に対しましてここで厚くお礼申し上げます。

平成22年10月

熊取町教育委員会  
教育長 西牧研壯

## 例　　言

1. 本書は、熊取町教育委員会生涯学習推進課文化グループ考古学技師前川淳を担当者として、平成19年8月28日から10月12日の間に実施した野田遺跡07-5区の発掘調査と、平成21年5月12日から9月2日の間に実施した東円寺跡09-1区の発掘調査の報告書である。
2. 現地での調査は、調査区をカラーリバーサルフィルムと白黒フィルムで撮影し、調査区遺構分布平面図、調査区壁面上層図、遺構断面図を作成し記録にとどめた。
3. 本書における図面の標高は、T.P.（東京湾平均潮位）を用いた。また方位は、地図以外については磁北を示すこととした。
4. 本書における図面の土色は、『新版標準上色帖』第10版（小山正忠・竹原秀雄編、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修1990年度版）を用いて目視により比定した。
5. 本書の作成及び発掘現場での作業にあたって、下記の調査員・調査補助員・作業員の参加を得た。  
関井澄子、前田公子、森田享子
6. 野田遺跡07-5区の現地の調査および報告書の印刷製本等にかかる費用は、有限会社楠本商事不動産の出資により実施し、東円寺跡09-1区の調査については、有限会社野田建物合同会社の出資による。
7. 本書の執筆は熊取町教育委員会生涯学習推進課文化グループ考古学技師前川淳が行った。

## 目 次

第1章 はじめに .....	1
第1節 地理的環境 .....	1
第2節 歴史的環境 .....	1
第3節 周知の遺跡 .....	3
第2章 野田遺跡 07-5 区の調査 .....	5
第1節 調査までの経過 .....	5
第2節 野田遺跡 .....	5
第3節 調査地点 .....	6
第4節 調査の経過 .....	6
第5節 層序 .....	7
第6節 遺構 .....	9
第7節 遺物 .....	12
第8節 まとめ .....	20
第3章 東円寺跡 09-1 区の調査 .....	23
第1節 調査までの経過 .....	23
第2節 東円寺跡 .....	23
第3節 調査地点 .....	24
第4節 調査の経過 .....	24
第5節 層序 .....	25
第6節 遺構 .....	25
第7節 遺物 .....	33
第8節 まとめ .....	39

# 第1章 はじめに

## 第1節 熊取町の地理的環境



熊取町は大阪府泉南地域の中央に位置し、貝塚市・泉佐野市の両市に囲まれた町である。町域は東西約4.8km、南北約7.8kmと南北に長い木の葉状を呈している。町域の総面積は約17.19km<sup>2</sup>を有する。地形による面積比を見ると、山地41%、丘陵24%、段丘23%、低地12%に区分され、山地・丘陵部が町域総面積の約3分の2を占めている。地域別に見ると、町南部においては、泉南地域の基本山地の和泉山地から派生する和泉丘陵とその縁辺部に発達する段丘部が多くを占めている。また北部では狭小ながらも河川の対岸に洪積地が形成されている。町域に水源を持つ河川は雨山川・和田川・大井出川・見出川の4水系が存在している。いずれも町南部の山間部を水源としており南部から北部へ向かって流下し、泉佐野市を経て大阪湾に注ぎ込んでいる。本町が瀬戸内式気候区の東端に位置しているために年間降雨量が少量であることから、古くから町域一帯に多くの灌漑用の溜め池を目にすることが出来る。

## 第2節 熊取町の歴史的環境

町内の遺跡は現在43カ所を数える。調査で発見された遺構や代表的な遺物について時代毎に簡単に説明する。

縄文時代以前の遺構は発見されていないが、熊取町野田の町立中央小学校の調査(東円寺跡93-2区)で縄文時代早期の有舌尖頭器と石鏃が検出されているので、これらが後世の流入品でない限り、熊取町に人がいた最も古い時代は今のところ縄文時代早期と考えられている。

明確に弥生時代を示す遺跡は発見されていない。熊取駅前整備事業に伴う平成元年の発掘調査(大久保E遺跡89-1区・90-1区・90-2区)では畿内第V様式に類似した甕等の土師器が大量に検出され、近畿一円の土師器との比較から古墳時代初頭の所産と考えられている。

古墳時代の遺跡は、初期の大久保E遺跡以外知られていない。今後の調査成果が望まれる。

飛鳥時代頃の遺跡としては、平成10年度の久保城跡98-1区の調査で飛鳥V様式期の土師器や須恵器が埋没した溝群が検出された。

奈良時代については、東円寺跡87-1区の調査で建物4棟と土壙、須恵器、土師器が検出されたのみにとどまっていたが、平成6年度の中央小学校の調査(東円寺跡94-1区)で帆立柱群を検出した他、平成11年7月熊取町七山で西暦750年以降の奈良時代を示す多くの須恵器が宅地開発の発掘調査で検出され、「七山東遺跡」としている。

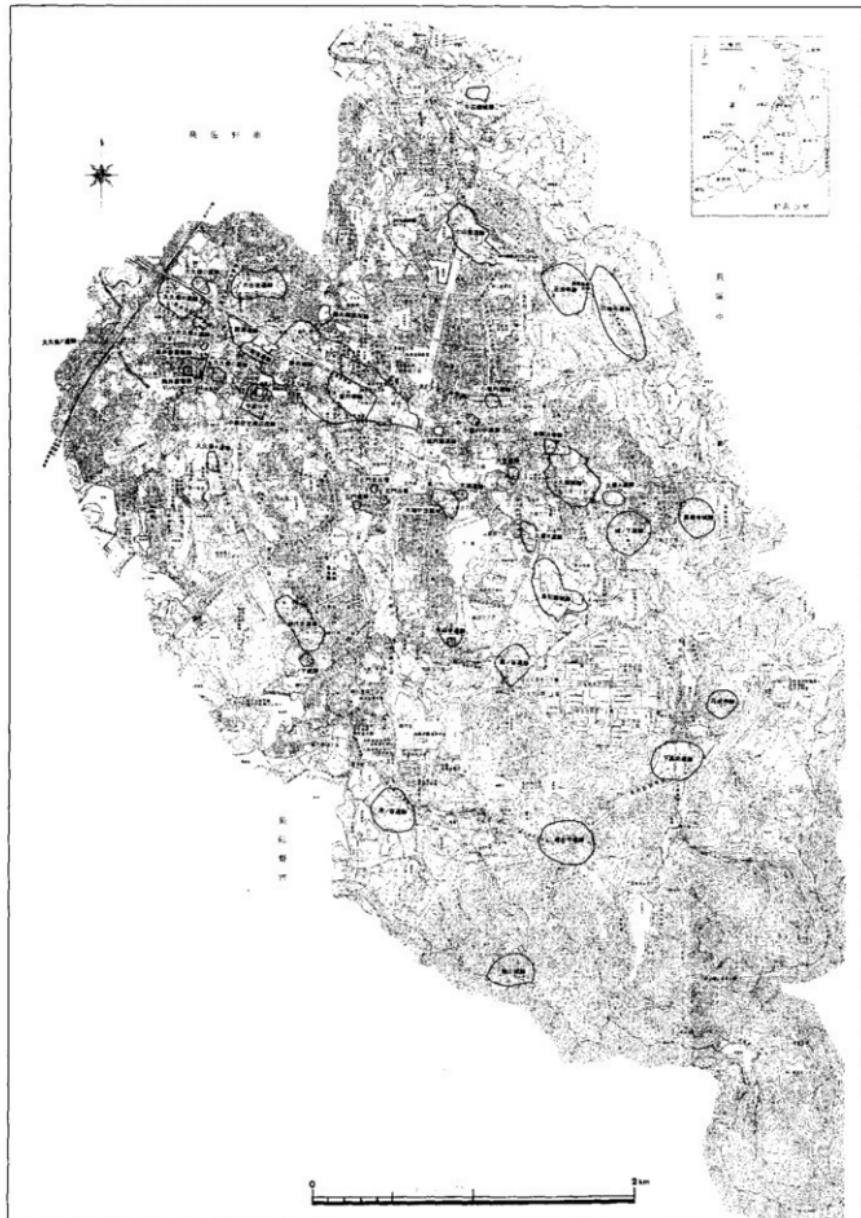
平安時代については、野田の熊取町役場付近に寺域が想定されている東円寺の創建が、発掘調査で発見された蓮華文軒丸瓦と唐草文軒平瓦の比較考察から平安時代末とされている。また平成8年度には大久保から紺屋にかけての病院の発掘調査で黒色土器や須恵器、上師器が自然流路内から検出されている。

鎌倉時代に関しては、熊取町内の遺跡のほとんどが同時代を中心とした様相を示している。野田の東円寺跡や野田遺跡、久保の久保城跡、大浦の大浦遺跡、紺屋の紺屋遺跡、七山の七山東遺跡では瓦器を豊富に含む包含層が存在しており、建物・溝といった遺構も検出されている。

室町時代の包含層は町域全域で検出される。重要文化財に指定されている和田の来迎寺の調査では戦国期相当の多数の土師器皿と瓦片が出土している。また小垣内西遺跡では15世紀末から16世紀頃の居館の一部とみられる溝の遺構が検出されている。

江戸時代の遺構としては、五門の重要文化財中家住宅と大久保の重要文化財降井家書院で多数の陶磁器や瓦の他、多くの溝跡・土壙が検出されている。現在の熊取町の前身はこの2つの江戸期の大庄屋の主導の基に成立した近世集落と考えられ、この2つの建造物周辺における調査は熊取町の歴史にとって極めて重要なと思われる。

### 第3節 周知の遺跡



周知の遺跡一覧表

遺跡名	種類	時代	地目	立地	面積	主な成果等
1 実迎寺跡	集落跡	鎌倉	宅地	丘陵腹	3 100m <sup>2</sup>	15~16世紀の陶磁器・土師器・瓦等検出
2 池ノ谷遺跡	散布地	旧 石器	水田	平地	62 300m <sup>2</sup>	
3 大宮遺跡	散布地	江 戸	宅地	平地	5 000m <sup>2</sup>	
4 東円寺跡	寺院跡	平安~江戸	宅地	平地	48 000m <sup>2</sup>	瓦・土器多数出土 寺院の形態は不明
5 城ノ下遺跡	城郭跡	室 町	宅地	丘 陵	61 800m <sup>2</sup>	
6 成合寺跡	墓 地	室 町	畑地	丘陵腹	69 000m <sup>2</sup>	14世紀代の600基以上の土壙墓群等検出
7 高麗寺城跡	城郭跡	室 町	山林	山 頂	34 800m <sup>2</sup>	土壙・堀切等の遺構を確認する
8 西山城跡	城郭跡	鎌倉	山林	山 頂	45 300m <sup>2</sup>	片見ノ亭・馬場・千畳敷の地名が残る
9 五門遺跡	散布地	古墳~江戸	宅地	丘 陵	2 300m <sup>2</sup>	土師器等が検出される
10 五門北古墳	古 墳	古 墳	宅地	丘 陵	1 900m <sup>2</sup>	現在消滅
11 五門古墳	古 墳	古 墳	宅地	丘 陵	1 500m <sup>2</sup>	現在消滅
12 大浦口世葬地	墓 地	室 町	墓地	平地	18 400m <sup>2</sup>	亨徳四年(1445)銘の五輪塔地輪等出土
13 久保城跡	城郭跡	鎌倉	水田	平地	86 300m <sup>2</sup>	飛鳥朝の溝から須恵器・土師器 他瓦器多い
14 山ノ下城跡	城郭跡	鎌倉	宅地	平地	6 800m <sup>2</sup>	
15 大谷池遺跡	散布地	古墳~江戸	池	平地	51 400m <sup>2</sup>	
16 祭礼跡	祭礼跡	室 町	山林	丘 陵	6 300m <sup>2</sup>	五門・相屋共同墓地
17 正法寺跡	寺院跡	鎌倉	宅地	丘 陵	55 000m <sup>2</sup>	
18 小垣内遺跡	寺院跡	江 戸	道路	丘 陵	7 000m <sup>2</sup>	毘沙門堂跡 現在消滅
19 金剛寺跡	寺院跡	室 町	宅地	平地	5 100m <sup>2</sup>	大森神社神宮寺
20 烏羽殿城跡	城郭跡	室 町	山林	丘 陵	72 600m <sup>2</sup>	
21 萩ノ谷遺跡	寺院跡	室 町	山林	丘陵腹	32 000m <sup>2</sup>	
22 花成寺跡	寺院跡	室 町	山林	丘 陵	28 000m <sup>2</sup>	
23 降片家屋敷跡	屋敷跡	宝町~江戸	宅地	平地	12 000m <sup>2</sup>	屋敷地を区画する構や近世の陶磁器等出土
24 人久保A遺跡	散布地	江 戸	宅地	平地	8 100m <sup>2</sup>	
25 下高田遺跡	条里跡	鎌倉	水田	平地	57 000m <sup>2</sup>	
26 人久保B遺跡	集落跡	弥生~江戸	宅地	平地	47 800m <sup>2</sup>	弥生末~古墳初期の遺物
27 初屋遺跡	散布地	古墳~江戸	宅地	平地	22 400m <sup>2</sup>	奈良~平安朝の河川跡検出
28 白地谷遺跡	散布地	宝町~江戸	田	谷	129 600m <sup>2</sup>	
29 大久保C遺跡	散布地	宝町~江戸	宅地	平地	4 500m <sup>2</sup>	
30 丁石堀跡	城郭跡	室 町	山林	丘 陵	1 000m <sup>2</sup>	天正年間(1573~92)の難賀典氏の城跡
31 口無池遺跡	散布地	平安~江戸	宅地	平地	11 200m <sup>2</sup>	平安末~鎌倉初期の遺構 遺物
32 大久保D遺跡	散布地	鎌倉~江戸	宅地	平地	9 200m <sup>2</sup>	
33 大浦遺跡	散布地	鎌倉~江戸	田	平地	4 900m <sup>2</sup>	13~14世紀の瓦器等検出
34 久保A遺跡	散布地	鎌倉~江戸	宅地	平地	4 400m <sup>2</sup>	遺物跡 8~14世紀の土器
35 久保E遺跡	集落跡	弥生~江戸	宅地	平地	2 900m <sup>2</sup>	弥生末~古墳初期の遺物多数
36 久保B遺跡	集落跡	鎌倉~江戸	宅地	平地	5 000m <sup>2</sup>	13~14世紀の土器等検出
37 中住家宅園遺跡	集落跡	宝町~江戸	宅地	丘 地	21 300m <sup>2</sup>	近世の附壁忍多数
38 朝代北遺跡	散布地	鎌倉~室町	宅地	平地	60 000m <sup>2</sup>	13~14世紀の瓦器等検出
39 七山東遺跡	散布地	奈良~室町	田	平地	80 000m <sup>2</sup>	古代須恵器・土師器・瓦器等検出
40 小垣内西遺跡	集落跡	奈良~室町	宅地	平地	3 600m <sup>2</sup>	古代須恵器・瓦器・瓦等検出
41 大久保F遺跡	集落跡	弥生~室町	宅地	平地	1 436m <sup>2</sup>	石器・平安頃の建物等検出
42 野田遺跡	縄文~江戸	宅地	平地	310 000m <sup>2</sup>	縄文石器・古代~近世の集落	
43 小垣内中遺跡	集落跡	奈良~室町	宅地	平地	3 500m <sup>2</sup>	中世の集落

## 第2章 野田遺跡07-5区の調査



### 第1節 調査までの経過

熊取町野田1丁目4-4、1994-1、1994-2、1999-1において、有限会社楠本商事不動産が住宅地の造成工事を行うに当たり、埋蔵文化財包蔵地「野田遺跡」に含まれることから、平成19年8月20日付けで、熊取町教育委員会生涯学習推進課文化財係に文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出され、平成19年8月28日に埋蔵文化財の確認調査を実施したところ、瓦器・土師器などの中世の土器群と溝跡などの遺構を確認した。熊取町教育委員会は現地において申請者に状況を説明しながら協議を行い、遺構と遺物が検出された地点について、道路新設工事の全部分と、宅地予定部分の一部の埋蔵文化財が工事による破壊を免れないことから、記録のための発掘本調査を実施することとし、宅地予定部分で東側の一段高くなった現況畑地部分は、工事による破壊が及ばないとのことであったので、埋蔵文化財をそのまま埋没保存することとし、住宅建設の際は個々に適切に対処することを申し合わせた。

### 第2節 野田遺跡

今回の申請地を含む野田遺跡は熊取町役場周辺一帯の約260,000m<sup>2</sup>にも及ぶ集落遺跡である。そのうち熊取町役場前の地域については、平安末期以降の寺院の瓦群や他の埋蔵文化財が非常に多く出土し、寺院を示すものと考えられる小字名が残されている区域であることから、早くより寺院跡の遺跡「東円寺跡」としていたが、この区域よりも外側にお

ける発掘調査の増加とともに、東円寺跡の範囲は年々拡大していった。野田全域における調査では、奈良期以前の埋蔵文化財が確認される例も多く、平安末期に創建されたとされる寺院跡の性格を超える様相となってきたため、平成15年11月に本来の「東円寺跡」部分45,000m<sup>2</sup>と、より広範な集落遺跡「野田遺跡」に分割した。

東円寺跡の範囲内における町立中央小学校の調査(93-2区)では、縄文時代早期と推定される尖頭器が出上るなど、遺跡は非常に広範な時代に及ぶことがわかつたり、現在の野田集落内の調査(87-1区、94-1区、02-2区、02-3区)では、奈良期の掘立柱建物群や須恵器などが検出されて、集落が営まれた時期は少なくとも奈良時代まで遡ることが推測される。出土する遺物を各時代毎に比べると、当初の寺院が存続していたと考えられる平安時代末期から鎌倉・室町時代に至るまでの間の遺物が圧倒的に多いことから、それらの時代を中心とする遺跡ということができる。集落は寺院の衰勢と同調して、中世の初期頃に非常に繁栄し、室町時代の中期以降に衰退したと考えられ、その後は多くが耕作地に変わり現在に至ったものと考えられる。

### 第3節 調査地点

今回の調査地点は熊取町役場の東南約300mの熊取町野田1丁目のかつて「上野田」と呼ばれた集落内に当たり、総面積1,488.02m<sup>2</sup>の分譲住宅造成地である。西側には熊取町立中央小学校があり、調査地点側に向かっては、昭和63年の発掘調査で中世集落の一部を検出するなどの成果を上げた住宅地がある(23頁参照)。現在のところ野田遺跡は当地点付近を東限としており、東側に広がる水田地帯でも集落遺跡が検出される可能性がある。調査地点もかつて水田だったが、昭和の中頃に工場と店舗が建てられて現在に至った。

地形については、調査地点の北約250m付近を東西方向に走る大阪外環状線方向に向かって緩やかに上り勾配となっており、東北方向にある丘陵の裾に相当するが、申請地の付近は極めて平坦であり、住居を営んだり、耕地を確保するのに適した場所であったと考えられる。南側は東から西に流れる見出川に向かって、水田が概ね段丘状を呈しているが、申請地のすぐ南側に存在する国道170号の両側には、巧みに盛り土などの造成を行って店舗や住宅を立ち並べて行った状況が窺われる。

見出川の北岸は比較的平坦な地形が東西方向に続いたらしく、国道170号は過去の時代より、泉佐野の海岸方向と貝塚の水間とを結ぶ幹線道路として開かれていたと考えられ、その途上に平安時代の末期頃野田の寺院(東円寺)が建立されたのである。

### 第4節 調査の経過

当初申請地の西半分には取り壊す予定の工場と店舗が存在したままであったため、全工程を2期に分け、西半分を第Ⅱ調査区とし、東半分側にある宅地及び道路予定箇所を第Ⅰ調査区として先に調査した。また、Ⅰ区は調査時の現況地表面の高さによる違いから、さらにⅠ-A区とⅠ-B区とに区分した。また、Ⅱ区の調査時には、既に埋め戻したあったⅠ区

- の西側に対して、遺構の広がりを確認するために帶状に拡張して第Ⅲ調査区とした。
- 9月3日 調査区設定。I-A区の北半分を掘削(機械・人力)、遺構検出(精査)
- 9月4日 I-A区の南半分を掘削(機械・人力)、遺構検出(精査)
- 9月5日 I-B区掘削(機械・人力)、遺構検出(精査)
- 9月6日 I-A区遺構検出状況全景撮影、I-B区遺構トレチ掘削(溝の形状把握の為)
- 9月7日 I-B区遺構検出(精査)・I-AB区全景撮影
- 9月10日 平面実測図作成準備、I-A区遺構トレチ掘削(溝SD2の規模把握の為)
- 9月11日 I-A区・I-B区遺構トレチ掘削、平面実測図作成準備
- 9月12日 I-A区雨水排水、I-A区遺構トレチ掘削、I-A区平面実測図作成開始完了、I区全面精査。I区全景撮影
- 9月13日 I-B区雨水排水、I-B区平面実測図作成
- 9月14日 I-B区平面実測図作成、I-A区・I-B区水準測量、壁面精査、壁面土層図作成、壁面写真撮影
- 9月18日 I-A区溝SD2掘削、I区埋戻し
- 10月4日 II区機械掘削、人力掘削、遺構検出(精査)
- 10月5日 II区・III区機械掘削、人力掘削、遺構検出(精査)
- 10月10日 II区遺構検出(精査)・写真撮影
- 10月11日 II区平面実測図・壁面上層図作成、III区遺構検出、III区写真撮影
- 10月12日 III区平面実測図作成、II区III区水準測量、II区III区遺構掘削・遺構断面図作成  
II区III区壁面土層図作成  
埋め戻して終了

## 第5節 層序

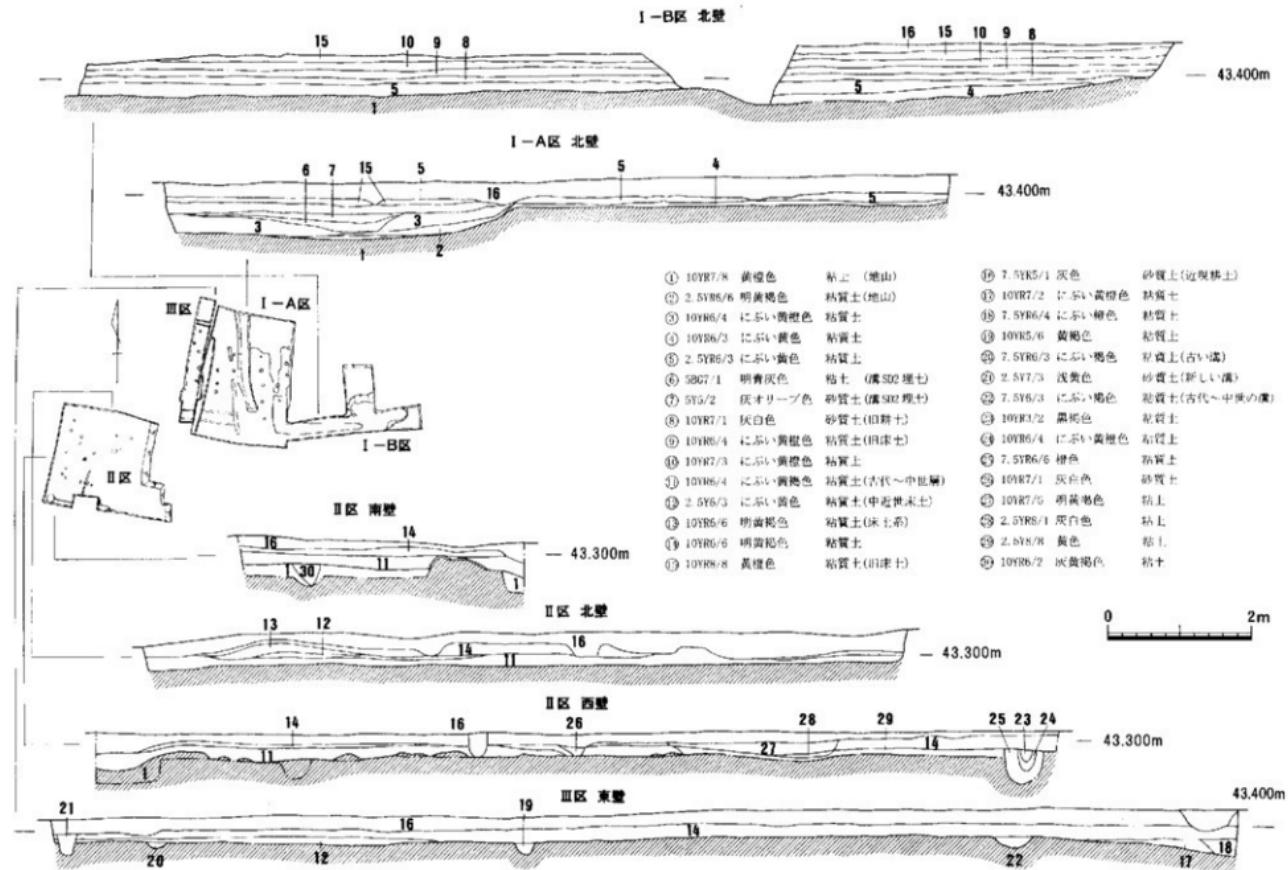
古代及び中世の土器破片を含む層④～⑧が調査区内外に存在するが、これらの層は遺構の埋土としても顕著に存在しており、室町時代後半の所産と思われる。これらの層は溝のような比較的深い遺構の中に残っており、調査区全体にも本来存在していた筈であるが、後代の耕作土の土取りや整地などで削平されてしまったものと考えられる。

調査区における基本的な層を示す。(最下層の地山から上の層に向かって)

- ①10YR 7/8 黄橙色 粘質土 地山
- ②2.5Y 6/6 明黄褐色 粘質土 (古代の層か)
- ③10YR 6/4 にぶい黄褐色(中世包含層)

溝 SD2の埋土は大きく2層⑥⑦に分けられる。見た目に違いが明瞭なもの、2層に大きな時間差は感じられない。

I-A区は削平の為、④⑤層の上に近年まで行われた耕作土層⑯⑯が存在するのに対し、I-B区は、削平を受けなかった為、中世の包含層と考えられる⑧⑨⑩層が、④⑤層の上に見られる。



## 第6節 遺構

調査区IではA区B区とともに柱穴群や溝群が検出されたが、I-A区では掘立柱建物と、大多数の遺物を含んだ溝(SD2)が存在する住居遺構であり、I-B区はSD9という大きな落込み状の遺構と柱穴数基以外に目立った遺構がない他、遺物も比較的少なかった。

調査区IIでは散在するピット群の他は目立った遺構や遺物は少なかった。いずれにしても調査区I、IIともに過去に地山まで達するか、地山面を削るような削平を受けたことがあり、元来存在していた筈の遺構や遺物、包含層などは今日に至る前に失われてしまったか、その上部を削られてしまっていると考えられる。従って今回の調査で確認された遺構群も、それらが地上に営まれた当時の状況からすると、正確な形状や規模を失っている可能性があることを考慮しなければならない。

### 溝SD1・SD3・SD6

調査区I-A区の西南部には、調査区の西壁に消えて行く形で、溝SD1とSD6の2本の溝が約1.5mの間隔で並行する状況で検出された。またSD1やSD6とほぼ垂直に交わる形状で、SD1らと全く同規模かつ同形状の溝SD3も検出された。SD3は南北に方向を持ち、検出面上では一旦途切れ、その下から柱穴と見られるSP17が検出されたが、西壁面のSD1とSD6を含む土層の観察から、SD1とSD6はこの調査区内のSD2や建物SB1、SB2といった集落にかかる遺構群が完全に廃絶した後に開削された溝であり、形状からして、この場所で行われた耕作に開する溝であったと考えられる。このSD1、SD3、SD6の埋土からは遺物は一切検出されなかった。

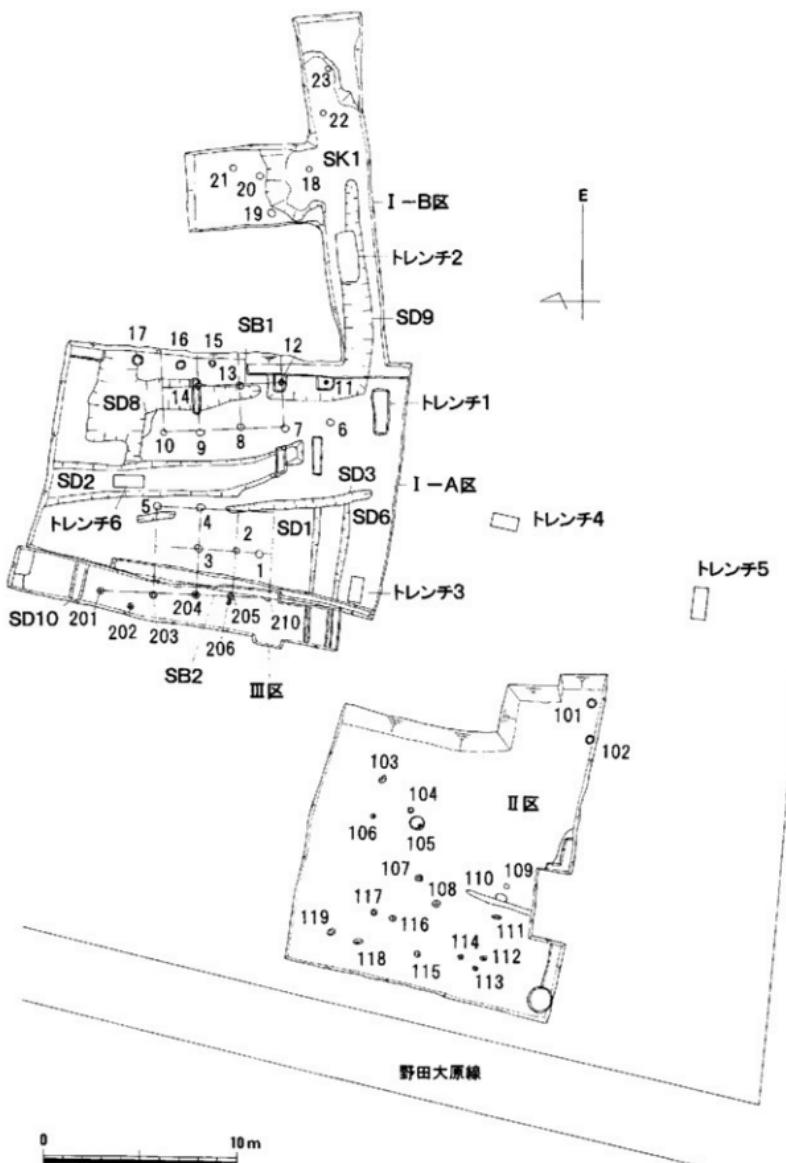
### 溝SD2

I-A調査区の中央部には南北方向の人為的な溝SD2が検出された。調査区内で検出された長さは南北13m程度で、トレチ掘削による土層の観察では、横断面の幅は1m、深さ50cmを測る。これは遺構SD2の溝を覆い尽くした埋土を含む規模の実測値であり、元来は断面がほぼ長方形に掘られた溝で、幅1.5m、深さ1m程度であったと考えられる。埋土は明灰色の粘質土で、検出時の層厚は約50cmほどを計測し、その上から下まで土器群を多量に含む。土器群はこの07-5区の調査で出土した全ての土器のうちの76%までを占める。

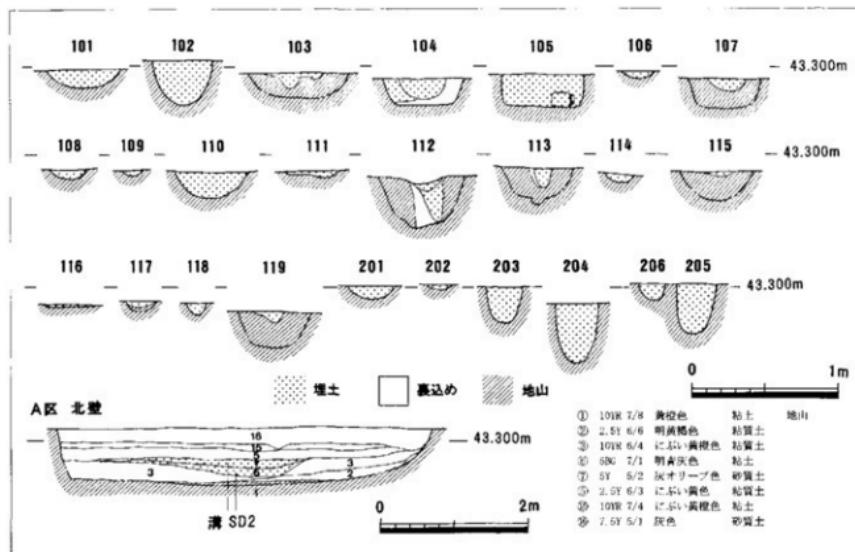
調査区域にはSD2以外にも、SD2よりも規模の小さな溝群(SD8など)が検出され、それぞれがSD2に接続するように開削されたかの如く観察される。

### 溝SD9

当初の試掘段階で既に発見されていた溝で、今回の調査では、I-B区の南端に東西方向約14m、幅約1.5mの溝が検出された。検出面となった黄褐色粘質土の地山からは、最大で深さ0.7mを測り、断面はV字状を示す。溝埋土の底部付近には比較的残存状態の良い瓦器碗破片を含む。また西端には、平面長方形のような形をした土壙SK1を検出しており、SD9



国道  
170  
号



はSK1と接続しているような状態で検出されている。土壤SK1の底部にも同様に瓦器楕が検出されるなど、二つの遺構の切り合いは不明であるが、一体の所産である可能性がある。

#### 溝SD10

調査区IIの調査を実施した際に、同時にI-Aの西側を調査区IIIとして拡張したが、北端付近に、東西方向に中世の溝を検出した。幅は0.7m、深さは約0.2m程度、埋土は一層で、遺物は検出しなかった。調査区I-Aの北西端部には、このSD10に続く溝は検出していない。I-A区の西半分は削平が行われており、SD10の続きを失われたものと考えられるが、或いはSD8へと繋がるかも知れない。

#### 建物

拡張によって開かれた調査区IIIやI-A調査区の西側から、溝SD2を挟んで、調査区の東側に至るまで、多数の柱穴群が検出されている。実測図によると、溝SD2を境にして、柱穴SP1～SP5とIII区の柱穴201～柱穴205の一群と、溝SD2の東側の柱穴SP6～SP10の一群とでは、柱穴の並ぶ方向にわずかの違いがあることから、2棟の別々の建物が建っていたものと思われる。柱穴どうしの間隔は、南北方向2.1m、東西方向2.3m程度を測る。

また、一つの柱穴の周囲に重複するような柱穴が検出されない状況から、建物は老朽化による柱の立て直しを受けていないと考えられるが、I-A地区の東端では位置関係が異なる柱穴群(SP15～17)も検出されており、異なる建物に建て替えたことも考えられる。また、

調査区全体から中世の前半代の瓦の出土が数点あるが、SB1やその他の建物の屋根を葺くには余りにも微量であり、これらの瓦は調査地点より約400mほど西側に存在したとされる寺院のものと考えられ、建物は瓦葺ではない屋根であったと思われる。

### 建物SB3

SB3は調査区 I -Bに検出された柱穴群より存在が推測される建物であるが、調査範囲の制限によって、規模などについては不明のままの遺構である。I -B区の北側は南側に比しておよそ50cmほど高くなっているが、これは非常に大きな落ち込み状の遺構SK1を掘削したための段差であり、SK1の上盤である北側部分のピット群は非常に小規模であり、南側の落ち込みSK1の底面に検出した柱穴群の方が規模が大きかった。SK1の上盤に検出したピット群を柱穴としない場合、下盤に検出した柱穴は合計3基であり、東西方向に2間分を検出したことになる。その3基の柱穴は東西方向に綺麗に1列に並んでいるが、先の建物SB1から東に12mほど離れており、かつその方向はSB1とSB2とは一致しない。

### 第7節 遺物

古代土師器	甕144、羽釜50、不明525	719
中世土師器	皿367、羽釜18、三足釜4、椀7、蛸壺3、不明579	978
古代須恵器	甕5、不明46	51
中世須恵器	甕66、鉢24、不明55	145
瓦 器	椀3450、皿323、鉢4、羽釜8、不明3747	7532
瓦	平32、丸20、軒瓦0（中世の瓦39、近世以降13）	52
中世陶磁器	白磁碗2、青磁碗4	6
近世陶磁器	不明な陶器2（唐津系・伊万里系はなし）	2
合 計		9485

※点数は接合後の状態で計算

調査区の西に南北方向に検出した溝SD2の埋土から全体の約76%に当たる7251点の遺物が検出された。

出土状態について、1枚の完形の瓦器小皿以外はすべて破片の状態で検出されたが、溝SD2の埋土中の多くの土器については、検出の段階で破片に分かれたものの、ほぼ原形をとどめた状態であり、土器群が溝SD2に転落した後には、2次的な搅乱を受けなかったと考えられる。

また、建物の柱穴の中から、瓦器や土師器の小断片が出土する例が見られた。

遺物破片点数9485点のうち、12%に当たる1143点の破片（瓦器椀302点、小皿系181点、瓦12点、器種不明648点）には二次的な焼け痕が観察できた。

## 瓦器

### 瓦器椀

直径が15cm弱で、器高3.6cm前後を測り、貼り付け高台は断面三角形よりもさらに潰れて撫で付けたような非常に低いものと、それよりも一回り大きい直径15cm程度、器高5cm弱で、高台断面が三角形を示す個体の2種類に分類できる。高台が最初から付けられていない瓦器椀は一切存在していない。椀の見込みに見られる暗文は渦巻き文様や格子文様で不規則に施されている。

尾上編年を参考にすると、そのIII-2期～IV-1期頃相当と考えられる。II期以前の瓦器は一切存在しないし、IV期の終盤やV期のものも存在しない。

### 瓦器皿

直径8cm大のもの、9cm大のものの2種類のサイズに分かれる。

## 土師器

土師器は皿の他、羽釜、鉢、蛸壺などがあり、古代の所産と中世のものと両方が検出される。

### 土師器皿

土師器の皿は凡そ4つのグループ分けができる。

- ① 口径が8.0cm前後で、高さ1.0cm前後の小さく浅い小皿（152、153、159、161、163、164）
- ② 口径7.5cm前後で器高が1.5cm以上の小さく深い小皿（157、160、167、169）
- ③ 口径8.5cm前後で高さ1.5cm程度の瓦器小皿に似る小皿（149、151）
- ④ さらに口径14～15cm、高さ2cm以上もある大きめの皿（147、148）
- ⑤ は古代の土師器の皿である。

### 土師器羽釜

131、132、133は口縁端部が大きく外上方に反る羽釜であり、瓦器の年代とも一致している。

### 土師器甕

いずれの個体も器壁が薄いなど古代の甕の特徴を見せ、奈良時代以降の所産と考えられる。町内一円の調査で類例が検出されている。

## 須恵器

東播系の捏ね鉢や、大甕の破片が出土している。大甕は古代の所産と、中世の所産が混在する。

## 軒平瓦

130は野田にあった寺院に特有の軒平瓦で、不整形忍冬唐草文様の瓦当をもつ。欠損が大きく本来の1/3程度の残存状態で、瓦当面も右半分以上を欠く30%程度の残存であるが、19

89-5区の調査で出土し、現在熊取町文化財に指定を受けている軒平瓦の瓦当とほぼ同范であり、これまで知られているこの寺院の軒平瓦の瓦当2種のうち、簡略化が進行したと考えられる方のタイプである。この寺院の軒平瓦はいずれの范であっても、瓦当の中央を中心として左右の文様が全く異なる非対称で、唐草文様本来が持っているであろう葉や茎の具象性を著しく欠いて、曲線と直線の組み合わせといった感になっているのが特徴である。

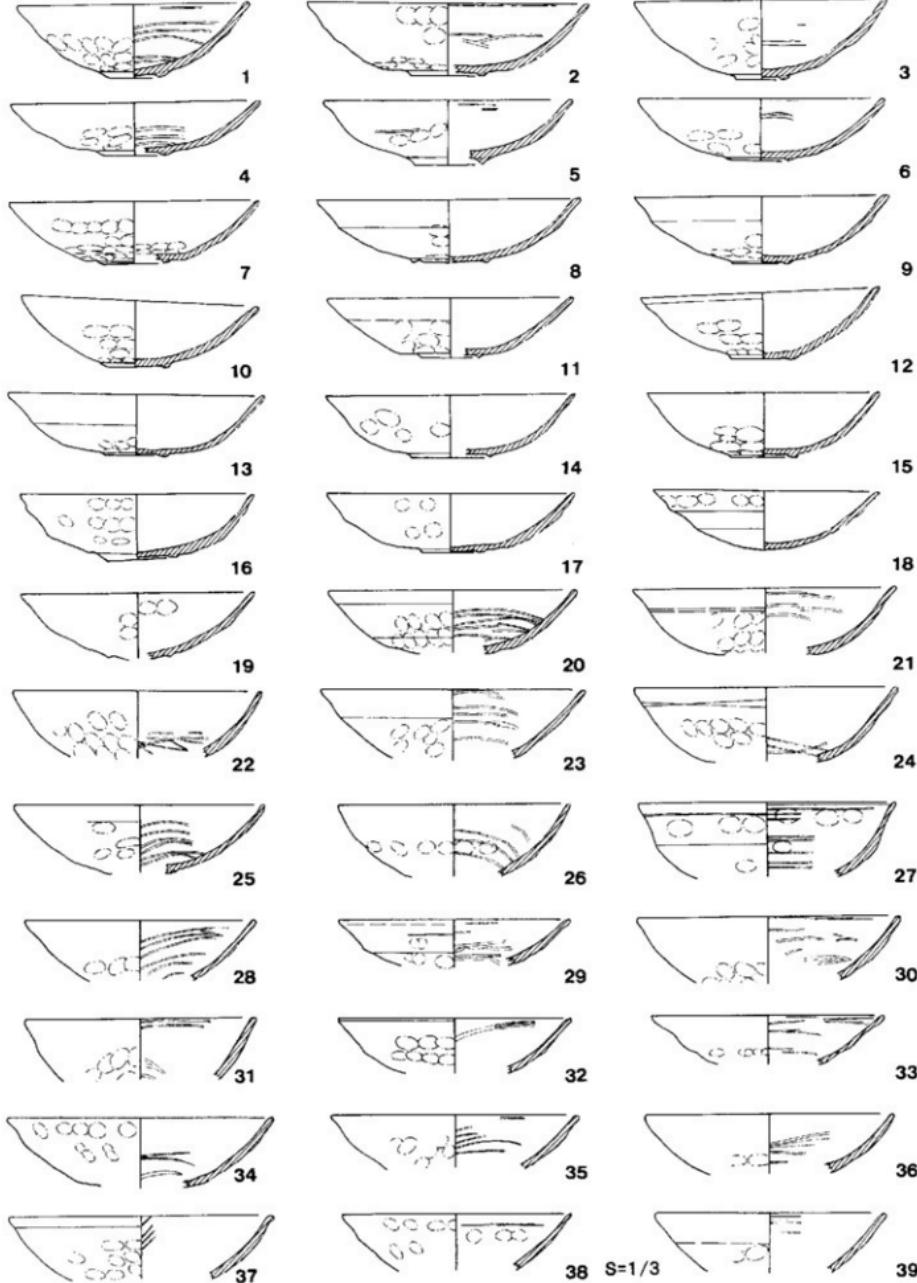
その他比較的瓦破片は多く、軒平瓦や瓦器群と同時代の所産と考えられる。

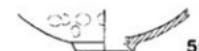
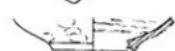
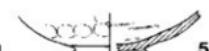
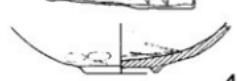
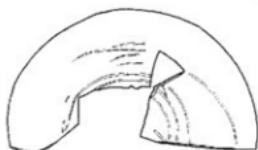
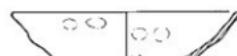
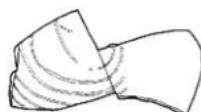
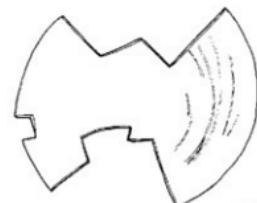
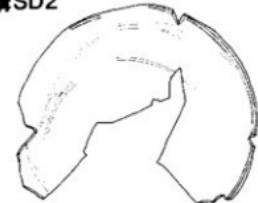
#### 陶磁器

白磁は溝SD2から碗の破片が2点出土している。142は発掘調査「太宰府条坊跡XV」における白磁碗VII-b類であると思われ、12世紀後半の生産年代が与えられている。

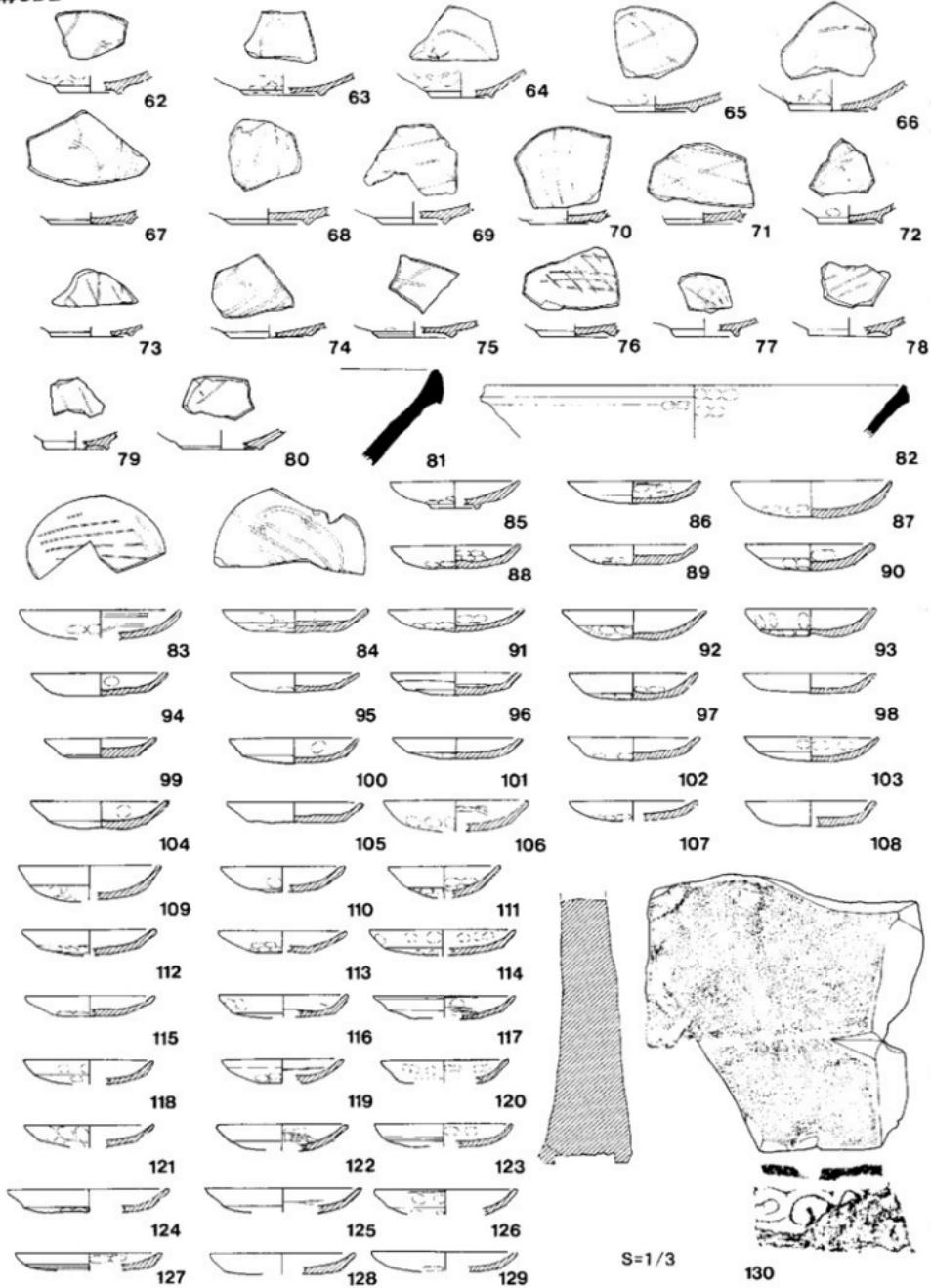
青磁碗も溝SD2の中から4点ほどの破片が出土している。138は残存状態が最も大きな破片で全体の50%程度が残っており、「太宰府条坊跡XV」における龍泉窯系青磁碗I類の碗(12世紀中～後半生産)と考えられ、外面無紋、内面に飛雲文があしらわれている。溝SD2から出土したこの個体は焼成が不良だったのか内外の釉の剥落が大きく、全体が灰白色を呈し、精緻な粘土紐巻上げを整形した痕跡が稜状になっている。またこの他に、内外面に細かな櫛描文が施されていることが特徴の同安窯系青磁碗I-b類が2片出土している(図版14)。この青磁の生産年代は12世紀中～後半とされている。139は龍泉窯系青磁碗である。外面無紋で、内面には見込みから口縁にかけて蓮華文が陰刻され、薄緑を帯びた青磁ではなく、緑褐色の器肌を呈している。青磁・白磁はいずれも当時破損した小断片の状態で出土しているため、日常的に使用された器であると言えるだろう。

溝SD2



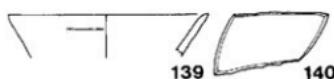
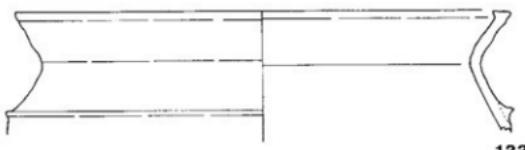
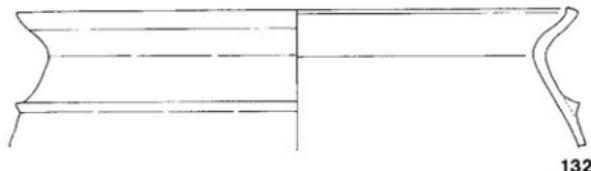
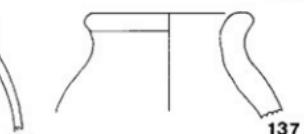
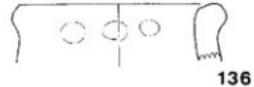


S=1/3

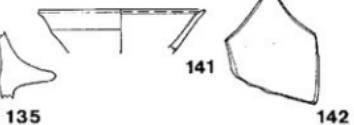


S=1/3

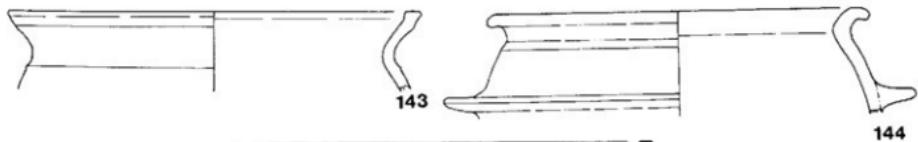
130



140



142



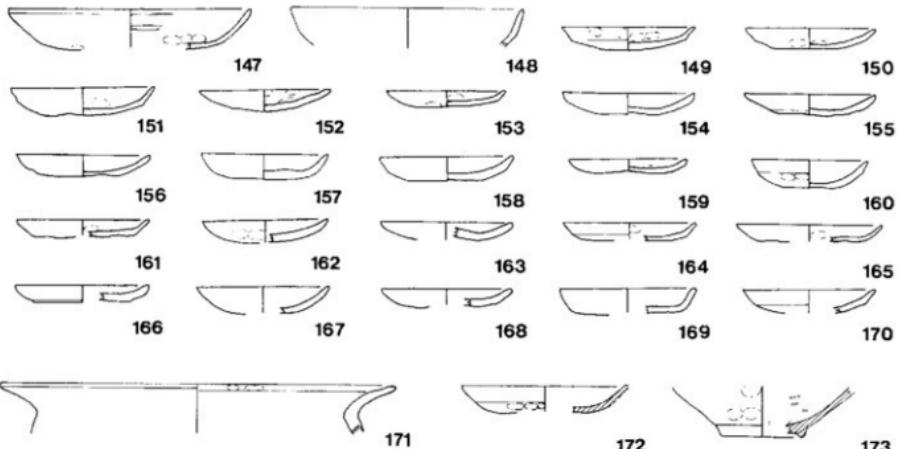
144



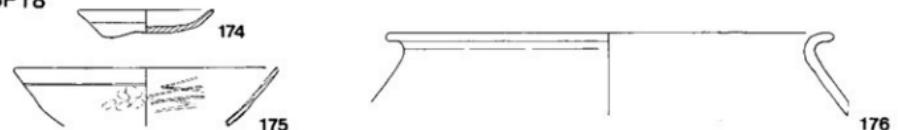
S=1/3



溝SD2



SP18



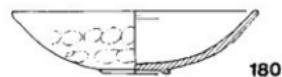
SP19



SP210



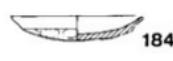
トレンチ1



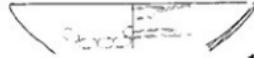
トレンチ5



遺構面精査



183



185

土器断面図の凡例

瓦・瓦器・瓦質土器

須恵器

土師器・陶磁器

## 第8節 まとめ

野田遺跡07-5区近辺でのこれまでの調査

### ①昭和63年度東円寺跡88-1区・88-6区の調査

昭和63年度には今回の調査地点のすぐ西側の住宅地の造成工事に伴って発掘調査を行い、13～14世紀頃の中世建物4棟の柱穴と溝、遺物として、中世の瓦器、土師器、須恵器をはじめ、青磁・白磁碗片、常滑の壺破片、ふいごの羽口片、開元通寶などの渡来銭などが検出されている。88-1区におけるSB-1は5×3間以上もある大きな掘立柱建物で、SB-2は3×2間の建物で、火を使用した痕跡があり、鋳造関連の建物と推測されている。

### ②平成4年度東円寺跡92-1区の調査

前記の東円寺跡88-1・88-6区の調査地点からさらに15mほど西の集合住宅の建設に伴う東円寺跡92-1区の発掘調査では、5×3間と思われる掘立柱建物1と、作業小屋的な掘立柱建物2の2棟が検出されており、これらの建物は13世紀の半ばから13世紀末まで存在していたと推測されている。遺物は瓦器・土師器・須恵器といった中世の遺物の中に、掘立柱建物1の柱穴の根石として埋め込まれた蓮華文軒丸瓦が2個体分出土したことが特筆される。このうち1個体は現在までに町内で出土した蓮華文軒丸瓦の中でも最も残存状態がよいことから、町指定文化財となっている。

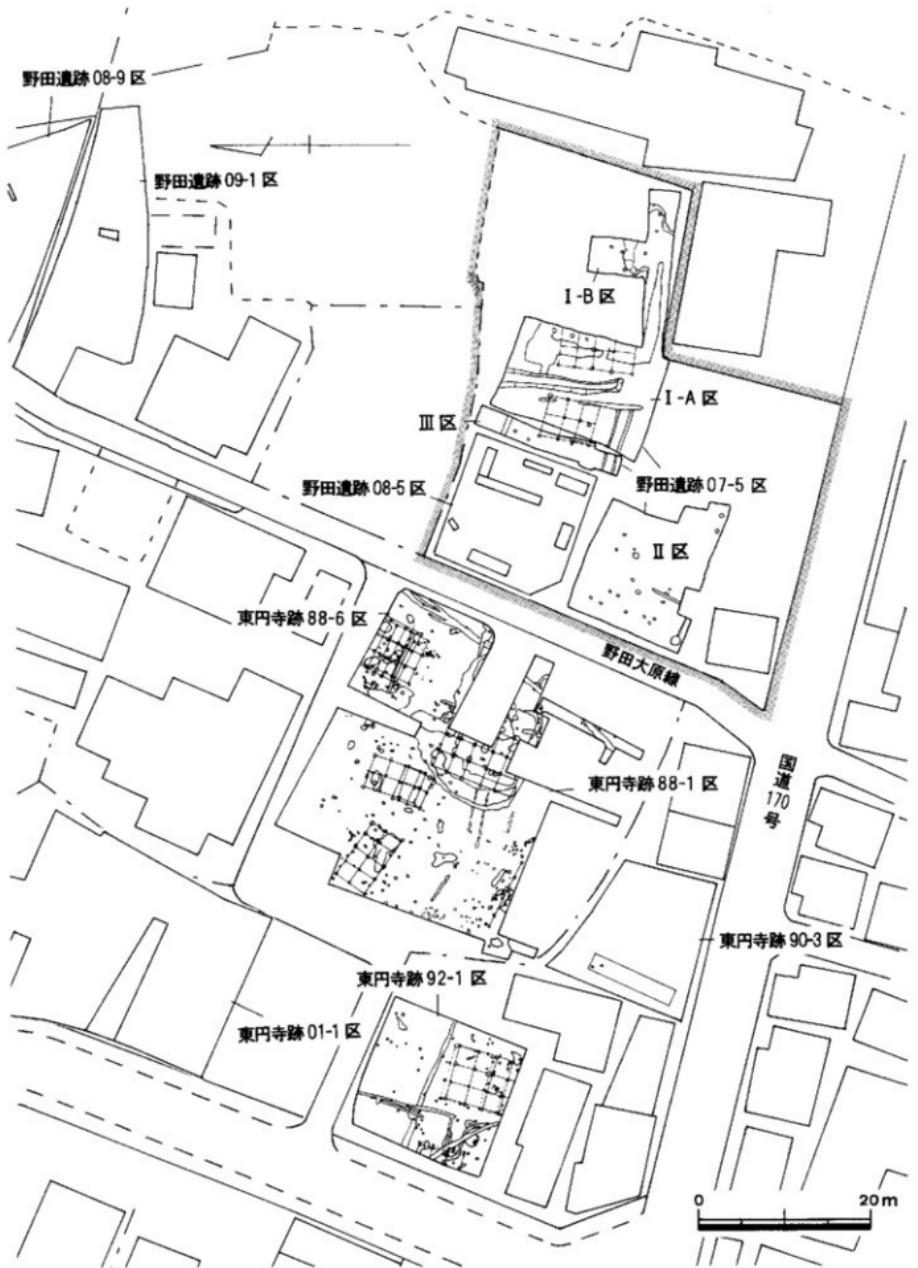
野田遺跡07-5区の調査成果について

溝SD2はその幅や深さなどの規模からだけでなく、断面が四角くなる端正な形状からもある時期に間に合わせて掘られたような臨時の溝ではなく、ある程度継続して溝として機能するように掘られた溝であると思われる。両岸に擁壁となるような矢板等を構築した形跡がない素掘りの溝であり、このことからSD2は、改修工事を施されることなく廃絶した比較的短命の遺構である可能性が考えられる。溝SD2は柱穴SP1などからなる建物群と完全に方向軸を一致させており、溝中から大量の土器群が検出されることから、建物SB1と同SB2の二つの建物との関係が考えられ、建物群が廃絶するのとほぼ同時に廃絶したものと考えられる。

建物の廃絶時期に関しては、焼けた痕跡のある土器群の観察から、推定することができる。溝SD2内には二次的な焼痕の赤色を呈する遺物はなく、調査区検出面上や僅かな包含層の中に赤変した土器が見られた。

調査区内で出土した遺物の破片点数は9485点で、二次的な焼痕のある土器は合計1143点を数え、全体比は12%である。赤変した瓦器碗は和泉型瓦器碗編年Ⅲ-3期からⅣ-1期頃にかけての所産のものに見られ、調査区内から検出されるやや高台の大きめの瓦器碗(Ⅲ-2期)には赤変した個体がほとんど見られない。

この状況からすると、この場所には和泉型瓦器碗のⅢ-2期頃に、建物群が営まれ、Ⅳ-1期頃に何らかの原因で周辺地域が広く火災に遭った際、建物群や溝SD2は火災で燃えなかつたものの廃絶してしまったと考えられる。



また、今回の調査区内で出土した屋根瓦には火災に遭ったことを示すものが複数含まれている。周辺地での調査でも、東円寺跡87-1区や92-1区の調査で出土した軒丸瓦もまた火災で焼けた明瞭な痕跡を残している。仮に二回以上の火災によるものではなく、一回の火災でこれらの瓦を葺く寺院が壊滅的な被害を受けたとすると、屋根瓦に見られる火災の痕跡と、調査で出土する瓦器椀や小皿の火災の痕跡は一致するものと考えるのが自然であり、このことからこの寺院が火災で壊滅する時期は、和泉型瓦器椀編年Ⅳ-1期に相当すると考えられる。

のことについて補足すると、これまでの調査で出土したこの野田の寺院の軒瓦については、軒丸・軒平ともにやや細工の細かな瓦当のものと、それを簡略したかのような瓦当の2種類が知られており、これは創建からある程度年数が経過した際に一度瓦を葺き替えたのか、或いは当初より寺院の堂舎の種類によって瓦当のデザインを少し変えていたのかのどちらかと考えられる。軒丸・軒平のそれぞれ2種類とともに火災で焼けた痕跡のある個体が知られているが、2度の火災がない限り、一度の火災に遭った時点で両種類の瓦当ともにこの寺院の屋根に上がっていたと考えるのが自然であり、吹き替えがあったというよりは、元来より建物によってややデザインの異なる軒瓦が葺かれていた可能性の方が高い。

今回の調査区07-5区が位置する現在の野田地区から東南方向に1.5kmほど離れた熊取町小谷地区で平成12年度に行った町道拡幅工事に伴う久保A遺跡00-1区の発掘調査でも、火災に遭ったことを明瞭に示す瓦器などの土器群を検出しているが、その瓦器椀もまた和泉型の編年Ⅳ-1期相当の所産であり、野田の寺院の瓦と今回の野田遺跡07-5区の調査で検出した焼けた瓦器などと照合すると、その瓦器編年が示す時期の熊取では一度に広範囲に火災が起つことが推測され、1.5km離れた地点どうしで一つの火災が類焼する可能性が低いことからして、何者かの手によって熊取が全域的に延焼した可能性も考えられる。

### 第3章 東円寺跡09-1区の調査



#### 第1節 調査までの経過

熊取町野田2丁目2329、2321-1他において、野田建物合同会社が店舗建築を行うことになり、埋蔵文化財包蔵地「東円寺跡」に含まれることから、平成21年4月14日付けで、熊取町教育委員会生涯学習推進課文化グループに文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出された。申請地は大阪いずみ市民生協の営業中の店舗と、その西側隣接地の水田（野田2丁目2329番地）とに分けて、水田部分を先に調査することとし、店舗部分は解体が完了してから調査を行うこととした。平成21年5月11日に水田部分の野田2329番地について埋蔵文化財の確認調査を実施したところ、瓦器・土師器などの中世の土器群と柱穴など多数の遺構を確認した。熊取町教育委員会は現地において申請者に状況を説明しながら協議を行い、野田2丁目2329番地に関しては、新規店舗建築部分の埋蔵文化財が工事による破壊を免れないことから、記録のための発掘本調査を実施することとし、同番地のそれ以外の主に駐車場とする場所では、埋蔵文化財をそのまま埋没保存することと決め、平成21年5月12日発掘本調査に着手した。

#### 第2節 東円寺跡について

東円寺（東耀寺）は現在地上に何ら痕跡を残さず、16世紀に著述されたとされる「葛城峯中記」に「野田山…」の記述がされる寺院で、平安時代末頃に創建され、中世～近世を通じて存続したものの中止維新の廃仏毀釈で法灯が途絶えたものと考えられている。

また江戸時代に著述された「先代考拠略」によれば、東円寺はかつて「東耀寺（トヨウジ）」と呼

称され、東耀寺は豊臣秀吉の来襲で完全に焼亡したことが読み取れるが、江戸時代に入つてから「東円寺(トケンジ)」として再建されたとされている。ただしこれまでの調査では、秀吉来襲時の火災の痕跡は見つかっていない。

東円寺跡の範囲内においてはこれまで多くの発掘調査が行われ、瓦器椀を中心とする中世の遺物と擲立柱建物跡が検出されているが、寺院の推定中心地では本調査・確認調査が行われていない。周辺の調査で出土した複弁蓮華文軒丸瓦や均等唐草文軒平瓦のうち残存状態の良いものは熊取町指定文化財に指定されている。これまでのところ軒丸瓦も軒平瓦とも、やや細工の細かい範と、それを簡略化したかのような範の2種類ずつが知られている。また発掘調査の成果から、熊取町野田にあったこの寺院は創建後数十年経た鎌倉時代の間に火災で大方の建物群を焼亡した可能性があり、出土する中世土器群の比較観察からして、火災が起きたのは14世紀前半頃と推測している。火災の原因は今のところ不明であるが、これまでの熊取町の他の区域調査でも、周辺に営まれた集落も同時期に焼けたことが窺われる所以、失火によるものではなく、人為的に起こされた火災の可能性が推測される。創建期の寺院が焼亡した後は、規模を縮小しながらも復興したと考えられるが、農地に作り変えられた寺城が多かったらしいことがわかっている。周辺では室町時代の前期頃までそのまま集落が営まれたようで、尾上式瓦器椀編年によるIV期の所産が多く検出される。15世紀以降の遺物は極端に少なくなる。

### 第3節 調査地点

今回の調査地点は、熊取町役場の西約300mの熊取町野田2丁目にあり、先に報告した野田07-5区のある上野田とは東西方向に離れた「下野田」と呼ぶ集落の北端に当たる総面積500m<sup>2</sup>の店舗予定地である。

調査地点の西側は既に店舗などが立ち並んでおり、緩やかに駅の西方向に向かって下り傾斜地になっているものの、概ね平坦な地形を呈している。

### 第4節 調査の経過

- 5月12日(火) 調査区設定(建物の平面形に設定)、機械掘削、遺構検出(精査)
- 5月14日(木) 機械掘削完了、遺構検出(精査)、壁面写真撮影
- 5月15日(金) 遺構検出(精査)、遺構検出状況全景撮影、壁面精査
- 5月18日(月) 遺構掘削、雨水排水用側溝人力開削
- 5月19日(火) 遺構配置略図作成、遺構(柱穴)断面図作成
- 5月20日(水) 遺構掘削精査、遺構断面撮影、遺構平面精査
- 5月21日(木) 遺構人力掘削精査、遺構断面図作成(柱穴110基)、遺構断面撮影、遺物採取
- 5月25日(月) 遺構人力掘削(完掘作業)、遺構断面図作成(柱穴残り)
- 5月26日(火) 平面実測図(遺構配置図)作成、遺構精査、遺構人力掘削
- 5月28日(木) 平面実測図作成、遺構人力掘削

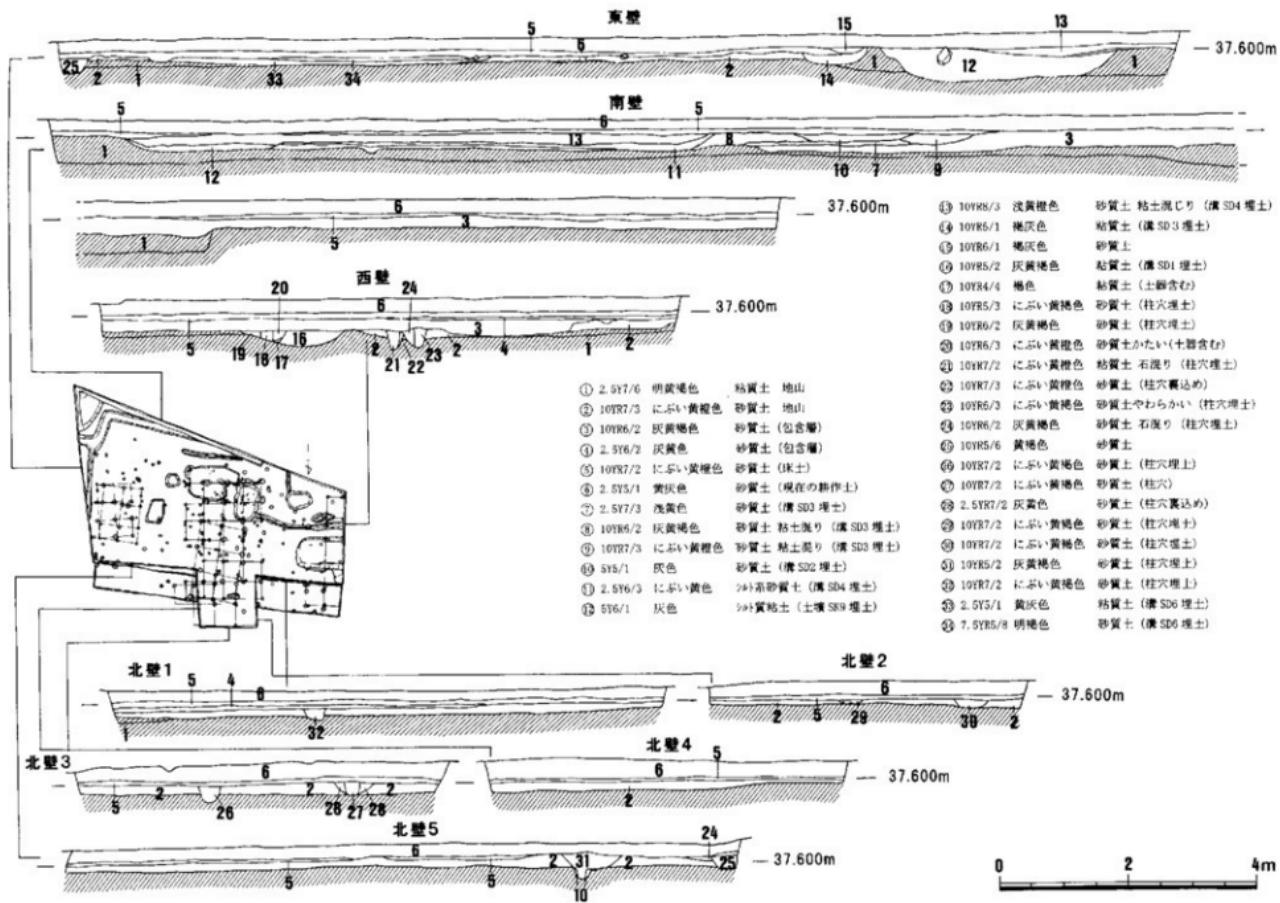
- 5月29日(金) 平面実測図作成、遺構人力掘削  
6月1日(月) 平面実測図作成、遺構人力掘削、遺構人力掘削  
6月2日(火) 平面実測図作成、壁面土層図作成、壁面精査  
6月3日(水) 壁面土層図作成、壁面精査  
6月4日(木) 壁面上層図作成、壁面撮影、調査区平面位置図、遺構掘削  
6月5日(金) 壁面土層図照合、遺構平面図加筆、撤収、遺構掘削(観察用畦)
- 8月28日(金) 第2次調査開始  
機械掘削、全面精査遺構検出、遺構検出状況全景撮影  
8月31日(月) 遺構掘削、遺構(柱穴)断面図作成、遺構断面撮影  
9月1日(火) 遺構人力掘削(完掘作業)、平面実測図作成  
※ 第2次調査については、途中で店舗の形状に変更があり、店舗の北側が北方向に拡張して面積が増加したため、夏季に入って新たに追加調査した。

## 第5節 層序

旧水田耕作土表面から-0.4mほどまでは、つい最近まで営まれていた水田の耕作土⑥(下層は床上⑤)が現場全域に存在している。その直下の層としては、調査区の西端付近に近世から中世まで遡る可能性のある耕作土系の土層④が約0.1mほど残存しているところがあり、さらにその直下に中世の遺物包含層である砂質土③が約0.2mほど存在している場合がある。これらの2層は調査区の東側では観察できないが、元来は存在していて、現代のある時期に開発によって地山面まで達する削平を受けて失われてしまったものと考えられる。その削平が行われた後に先の耕作土⑤層⑥層が営まれているので、その開発は元来存在していた中世から近世までの耕作土を農耕に有効な地味土として他所へ動かしたものと考えられる。中世の耕作土系包含層③は直下の粘質土②層を切り込んでいる。この②層は無遺物層で、②層直下の黄褐色粘質土層①とともにこの付近の地山である。②層は①層に比べてやや暗い黄褐色を呈し、層中にはやや大きめの砂粒を含むなど粗めの粘質土である。なお調査区内には縦横に走る溝状の遺構が検出され、調査区壁面に平行するものもあるため、溝の遺構埋土の縦断面が壁面の左右方向に長くかかって観察されるところが数箇所存在する。特に調査区の南壁面に溝状遺構SD3の埋土が東西方向およそ10mも存在するため、南壁に基本層序を見るのは難しい。

## 第6節 遺構

この調査で検出した遺構は、掘立柱建物(柱穴)と溝、土壙である。掘立柱建物はそれぞれの場所で3度程の建替えが行われたと考えられるような検出状況を示した。



### **掘立柱建物**

掘立柱建物は今回の調査の範囲内に7棟検出した。それぞれの建物の軸の方向の観察から、およそ3つの時期に分かれる建物群と考えられ、この地点における初現と考えられるSB1は軒丸瓦・軒平瓦を伴う寺院が創建された平安時代末期頃の可能性がある。残りのSB2以下の建物は、柱穴にこの寺院に葺かれていた瓦が使われていることから、この寺院が火災等によって廃絶した後に営まれた中世の建物と考えられる。

#### **建物SB1**

SB1は調査区の中央部分で、南北方向3軒、東西2軒の規模で検出された掘立柱建物で、SB1を形成する柱穴が全柱穴の中でも格段に深く(40cm程度)大きく、また柱間も南北2.4m、東西2.2mと非常に大きい。ただし東西方向の柱は建物を構成し得る最小の2間しかないため、このSB1は倉庫的な建物だったと考えられる。SB1は調査地点で最初に営まれた建物と思われるため、熊取町野田に平安時代末期に営まれたという寺院との関係が考えられるが、そのことを裏付ける資料は今のところない。この寺院に使われた瓦のほとんどが赤く焼けた状態で検出されるため、寺院は火災を起こして廃絶したものと考えられるが、SB1の柱穴には焼けた土などは一切検出できなかった。

#### **建物SB2**

先のSB1の上に建てられた掘立柱建物で、検出した柱穴の検出面からの深さの平均は15cmと、今回の調査ではSB1に次ぐ規模を呈し、東西方向に4間ないし5間の箇所があり、さらに南北方向には調査区内だけでも6間の柱穴が検出されていることから、今回検出した建物の中では最大規模であり、この調査地点の周辺に展開する集落の中でも比較的規模の大きな建物である。やや入り組んだ平面形状をしているため、人が居住する建物の可能性が高いが、端部の主柱の外側に、柱間隔の短い柱穴列などが見られないことから、作業を行う建物である可能性もある。また、掘立柱建物に付属することが多い建物周囲を囲むような細溝群は一切検出しなかった。また、このSB2から西方向に5mほどの間隔で、同一方向の軸をもった東西2間、南北3間ほどの掘立柱建物SB4が営まれており、SB4はその規模からして倉庫的な用途が考えられる。

#### **建物SB3**

SB3は先のSB1やSB2と同一平面上に建てられた掘立柱建物で、建物の方向がSB2よりわずかに東側に振れている。規模は東西2間、南北5間ほどで、柱の間隔がややばらつきが見られることから、倉庫的な建物ではなかつたかと推測される。

#### **建物SB5**

SB5はSB3と同一方向軸をもつ2間×3間の建物であるが、南北方向に3間ある柱穴の間隔が一定でないことなどから、倉庫的な建物であった可能性がある。

#### 建物SB6

SB6はこの東円寺跡09-1区の8月の第2次調査で第1次調査区域を拡張したことによって、存在が確認された建物で、方向はSB2とほぼ同じである。ただしSB2を構成する柱穴群と重なり合うので、SB2とは前後関係がある。むしろSB3と同一時期に建てられた可能性が高い。このSB6の南北方向の広がりは、第2次調査区のさらに北側へ向かって広がっているので不明であるが、東西方向は3間である。

#### 建物SB7

SB7は調査区の西端部に検出された柱穴群で、南北2.2m間隔で5間、東西1.8mの間隔で2間分だけ確認されており、さらに調査区外に広がっているものと考えられる。柱穴はそれほど深いものではない。

#### 土壙SK1

SK1は先述の建物SB7と重複して検出された平面長方形の土壙である。土壙の底部もしくは埋土中に拳大から径3cm前後のほどの小礫が詰まっていることが特徴で、さらにこのSK1内には柱穴と思われるピットが10基ほど検出されている。柱穴とSK1とは同時期の所産とは考え難いが、前後関係は不明である。土器は比較的少なく、寺院に関する瓦類は検出してない。また埋土中に焼土は全く見られない。のことから、SK1は寺院が営まれる以前もしくは同時に掘削され、寺院が火災で廃絶する前に埋め立てられた遺構であると考えられるが、この調査やこの周辺で行われた調査においても、寺院が焼失した時に生じる筈の焼土やその痕跡が検出されたことがないので、このSK1のような遺構の年代を類推するのは難しい。

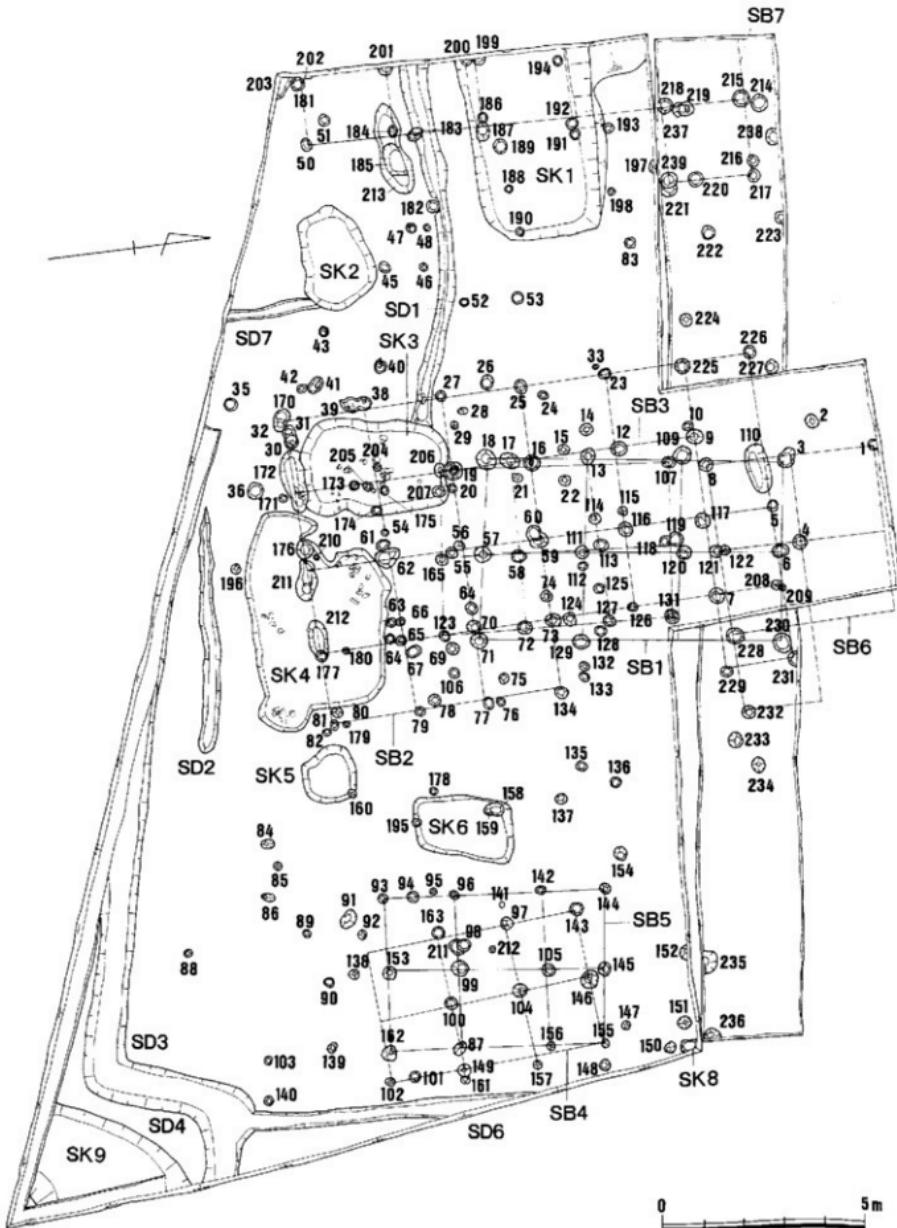
検出された小礫はごく普通の小石であり、周辺に散らばって存在した小石をまとめて廃棄した上壙であった可能性も考えられるので、その場合は室町期になって、この周辺が農地化した際に、邪魔になる小石をまとめて廃棄した土壙であるとも考えられる。

#### 土壙SK3

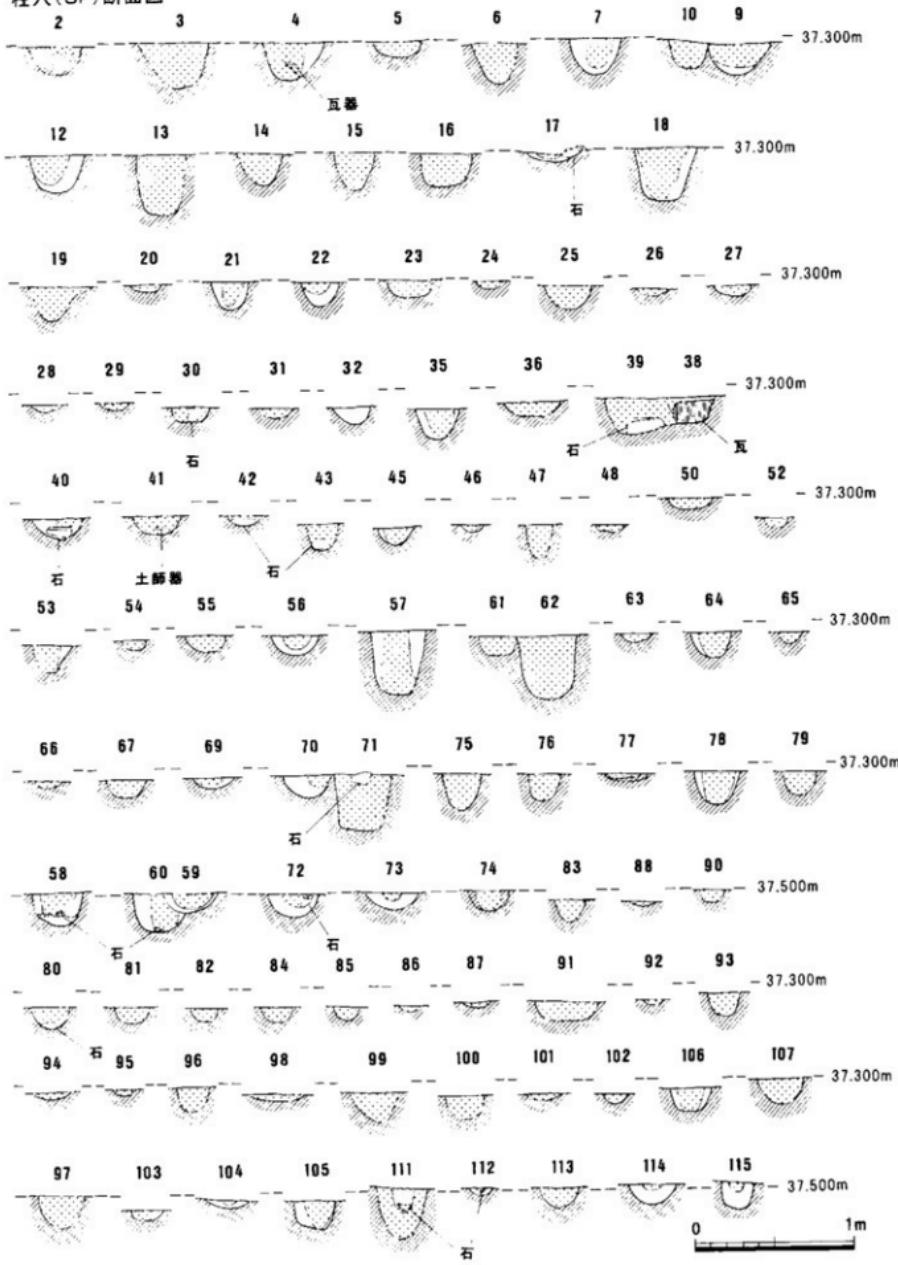
SK3は調査区の南西端付近に検出した長辺4m、短辺3m、深さ20cm程度を測る長方形の土壙で、SK3の南東端に溝SD1が取り付いているのが特徴である。従ってSK3は溝SD1と一緒に機能する遺構と考えられるが、先に述べた建物群との関係は不明瞭である。ただし当地点での初現とされる建物SB1がもう1間(2間)南に延びる可能性があり、柱穴を上から削っていくことになるので、この土壙SK3は建物SB2以降の所産と考えられる。瓦類が特に多く、軒平瓦41もここから検出している。

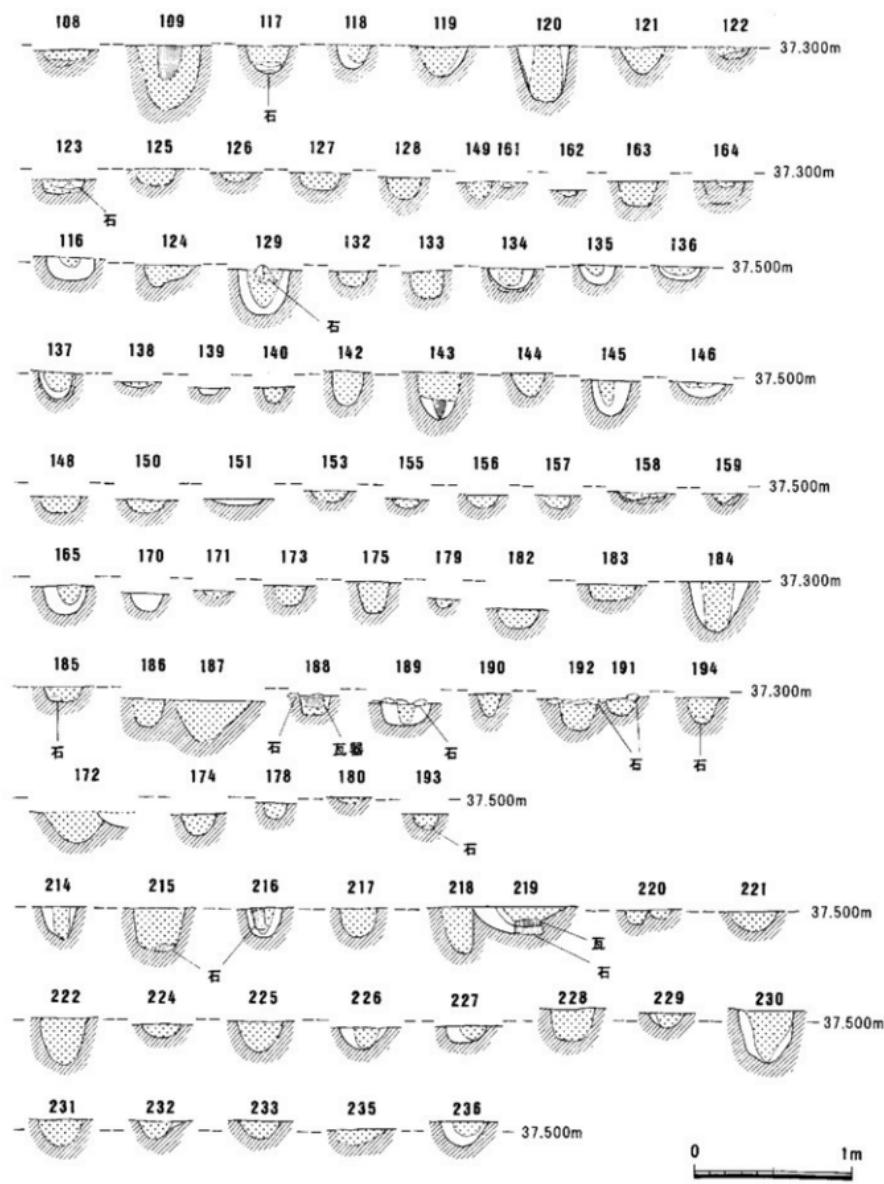
#### 土壙SK4

SK4は3.5m×2.5mのほぼ長方形を呈する土壙で、埋土中に多くの石や瓦破片を含んでいる。検出面から底部までの深さは平均で約30cm程度であり、底面はほぼ均一で平坦である。こ

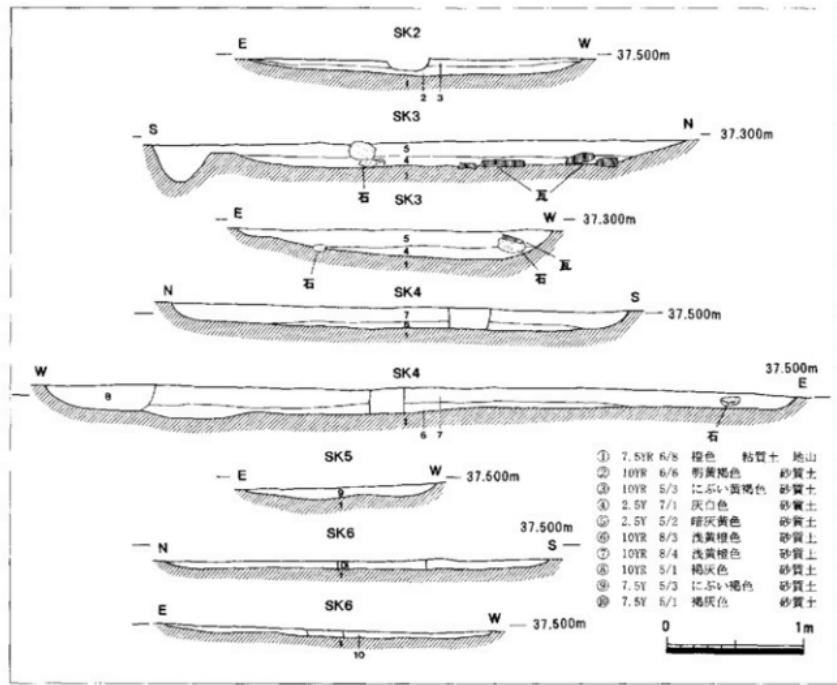


柱穴(SP)断面図





柱穴の埋土 埋土 裏込め 地山 柱根



の土壤には溝は接続しない。埋土には複数の面が焼けた痕跡のある石や、二次的に焼けた瓦破片などが多く存在することから、このSK4はこの付近に営まれた寺院が焼失した後になつて掘削された土壤であると考えられるが、いわゆる焼土に相当する層がなく、2次焼成を受けた幾つかの瓦と石が入っている状況であった。このことから、この場所で大きな火災が起きたのではなく、少し離れた場所にあった寺院が焼け落ちた後で、何らかの理由でその瓦や石をこの調査地点まで運んできた後に、最終的にSK4の土壤内に廃棄されたと考えられる。

土壤SK5

SK5は東西南北両方向に1.4m幅で、10cmの深さの土壤で、その方向からすると、建物SB2と同時期の所産のものではないかと考えられる。

土壤SK6

SK6は南北2.4m、東西1.8mの長方形の土壤で、建物SB2とSB4の中間にあった遺構と考えられるが、用途は不明である。

## 第7節 遺物

古代土師器	甕34、羽釜6、不明128	168
中世土師器	皿9、羽釜14、三足釜4、椀2、土錘1、不明76	106
中世須恵器	甕3、鉢12、不明23	38
瓦 器	椀352、皿20、黒色土器15、羽釜1、不明573	961
瓦	平20、丸2、軒瓦0、不明128（中世の瓦、近世以降13）	150
中世陶磁器	白磁碗1	1
近世陶磁器	不明陶磁器34	34
石	柱の根石系5	5
鉄 片	用途不明鉄片5	5
合 計		1468

出土遺物については、今回の調査区内では過去の削平によって、包含層や地山面が失われてしまっている場所が多いことが考えられ、それを裏付けるように、検出面までの範囲で検出した土器は小さな碎片のものが多く全体的に量も少ない。反対に土壌などの遺構内から検出した土器には図化できるものが多かったため、遺物実測図は遺構毎に示した。

特徴的な遺物について概観しておく。

62は台付き鉢とも呼ばれている土器で、高台の高さが高く、口縁が広く開く土器の底部と考えられる。残念ながら体部や口縁は欠如して全体はわからないが、町内での検出例は非常に少ない。

64は白磁の椀である。「太宰府条坊跡X」によると、白磁碗IV-1a類であると思われ、生産年代は太宰府条坊跡XⅡ期～XⅢ期(11世紀後半～12世紀前半)の生産年代が与えられている。

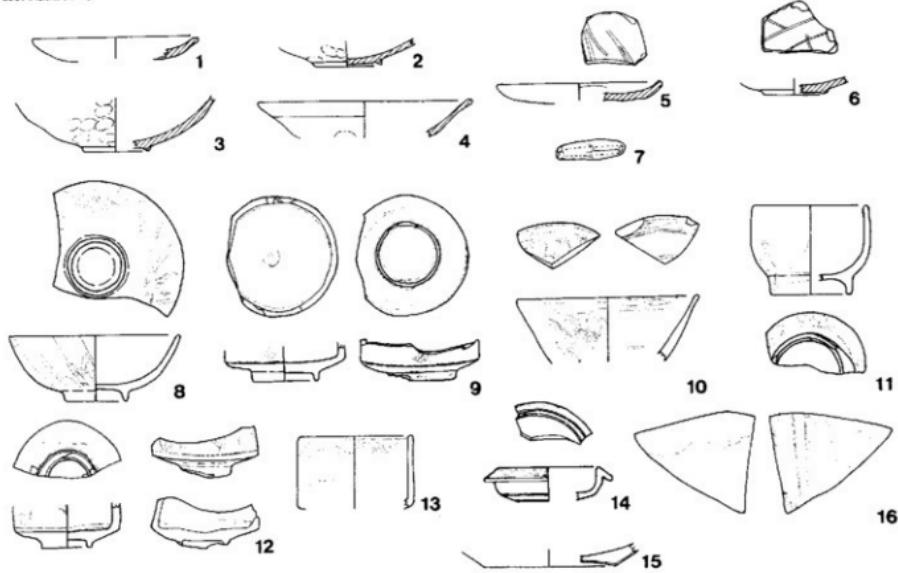
17・22・42は野田に存在した寺院(東円寺跡)の軒平瓦の瓦当部分が残る破片である。周辺でのこれまでの発掘調査では、文様の省略の有無で判別可能な2種類の軒平瓦が知られているが、今回出土した軒平瓦の3つの破片はいずれも省略のない方の範と考えられる。

42は元の軒平瓦の1/8程の体積に割れた破片で、検出された3つの軒平瓦の中で瓦当面の残存状態が最もいい個体である。二次焼成を受けているが、瓦当面には元来の黒色もよく残されている。

22は17と同じ程度であるが、全体の1/15程度の破片である。全体がレモン色に焼けている。

17は最も遺存状態の悪い個体で、全体が二次焼成を受けている上、瓦当面も文様が判別できないくらいに磨耗している。

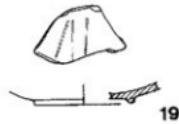
機械掘削時



トレンチ1



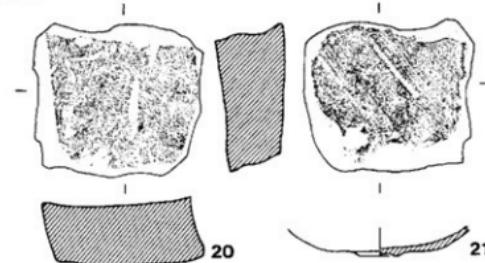
SD1



南壁



SD2



S=1/3

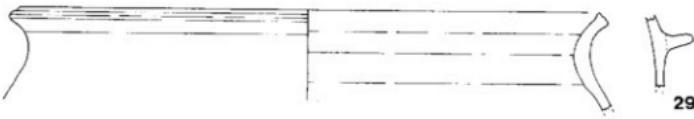
SK1



SK2



SK3



27

29



30

31

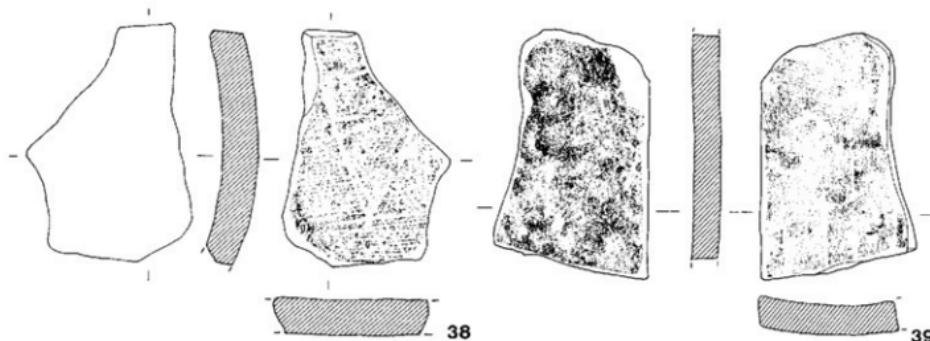
32

35

34

33

37

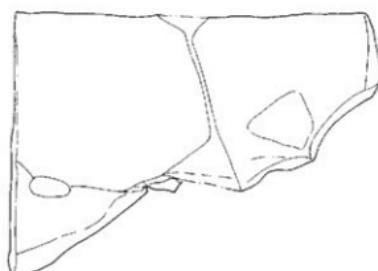
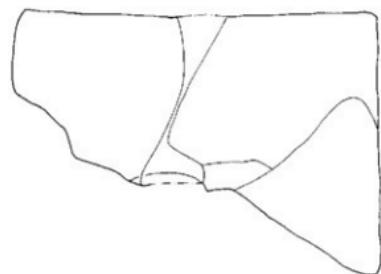


36

37

38

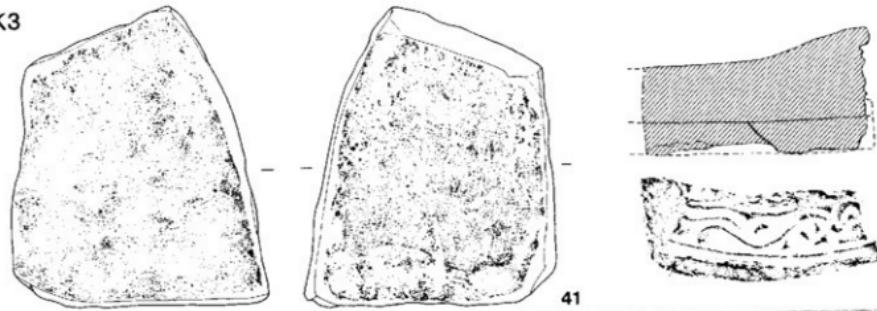
39



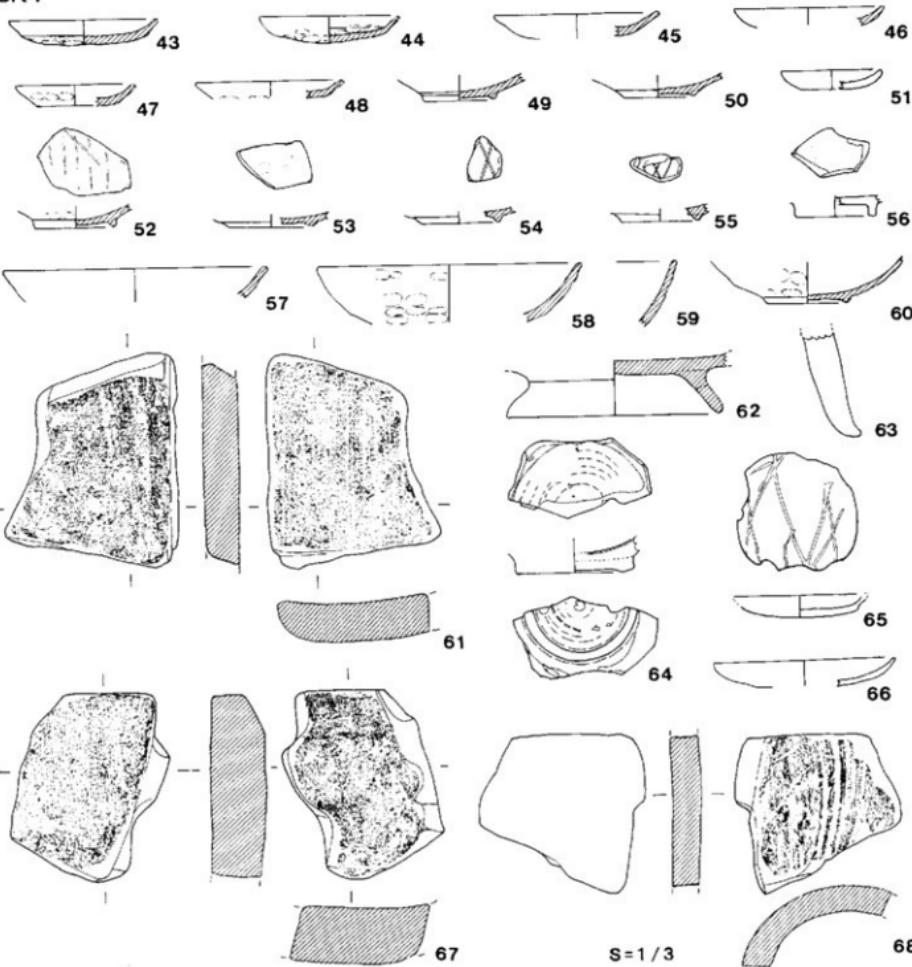
S = 1 / 3

40

SK3



SK4

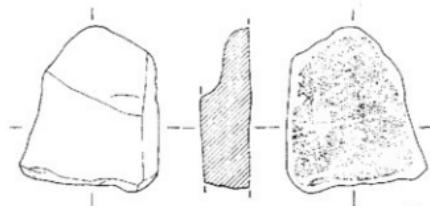


S = 1 / 3

SP4

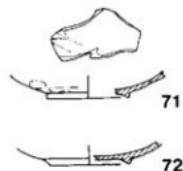


SP19



70

SP12

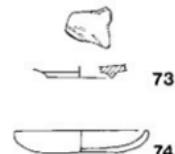


71



72

SP18



73



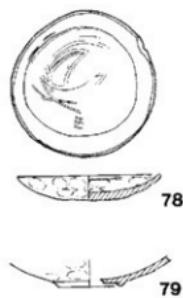
74

SP23



76

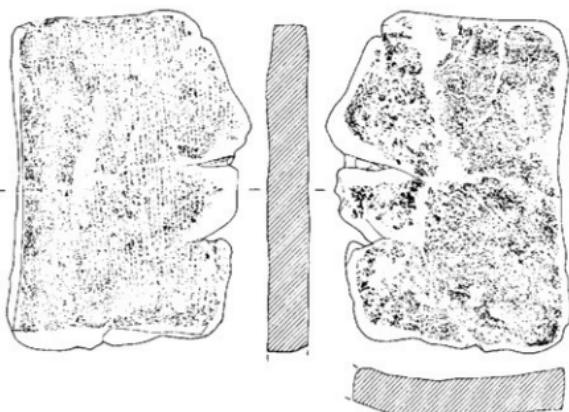
SP51



78

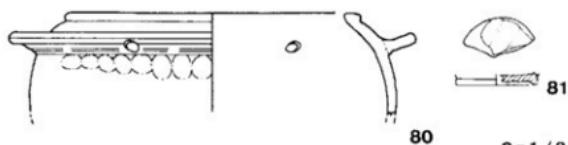
79

SP38



75

SP71



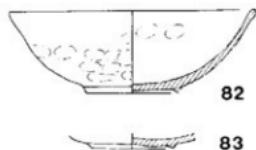
77

80

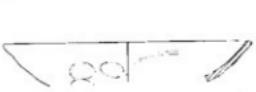
81

S = 1 / 3

SP83



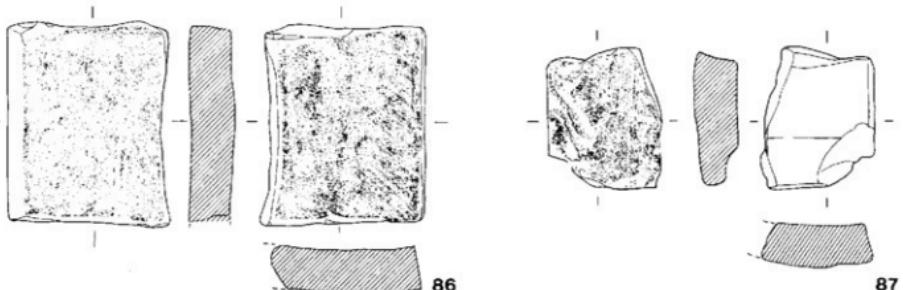
SP109



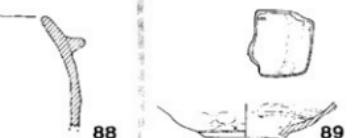
SP165



SP79

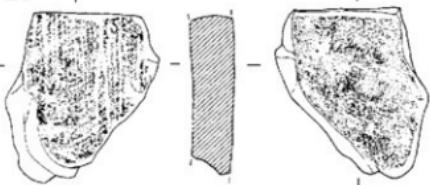


SP188

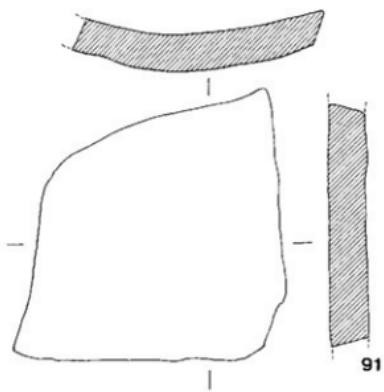


SP143

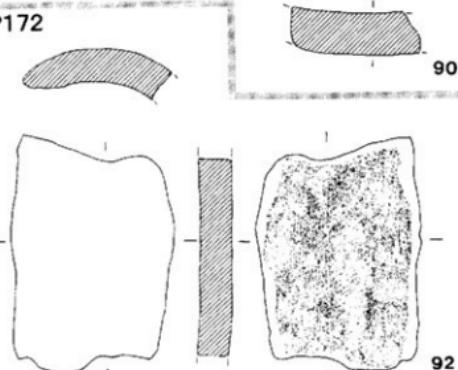
SP120



SP183



SP172



土器断面図の凡例

■ 瓦・瓦器・瓦質土器

□ 土師器・陶器

S = 1 / 3

## 第8節 まとめ

### 東円寺跡09-1区近辺でのこれまでの調査

今回の09-1区の調査地点の近辺ではこれまでに多くの発掘調査が行われて成果を挙げており、その蓄積によってこの地域の過去の状況が徐々に判明してきているので、最後に記しておく。

#### ①昭和60年度東円寺跡85-2区の調査

昭和60年度には今回の調査地点のすぐ南側の個人住宅建設で、13~14世紀の中世建物の柱穴と溝、軒平瓦などが検出されている。検出された遺構は溝5条と、2カ所の石溜まりとピット14基である。石溜まりには大量の石と瓦片が出土している。瓦の多くは二次的な焼成を受けている。遺物は奈良期の須恵器の破片や、中世の瓦器、蓮華文軒丸瓦や唐草文軒平瓦(簡略化されていない方)の一部なども検出している。

#### ②昭和62年度東円寺跡87-5区の調査

昭和62年度には先の87-5区で、今回の工事で解体されることになった店舗の新規建設に伴って発掘本調査を実施し、遺構としては、溝4条、中世の建物1棟、土壌群などを検出し、瓦器や瓦等の主な中世期の遺物を検出している。このうちSD1とSD2については土地を区画するために掘られた溝との推測がされている。建物SB-1は2×5間で、1.6mと1.5mの間隔で柱穴が掘られていた。出土瓦片の中に、蓮華文ではなく巴文軒丸瓦の瓦当の一部があった。野田にあった旧寺院の軒瓦で巴文の中世の軒丸瓦の出土はこれまで非常に少ない。

#### ③昭和62年度東円寺跡87-3区の調査

今回の東円寺跡09-1区の西北側に接する場所の調査で、多くの柱穴らしきピットと溝跡を検出している。柱穴には瓦片や石を根石に使う例が見られ、今回の調査区で検出した柱穴とほぼ共通している。唐草文軒平瓦も出土しており、二次的な焼成を受けた痕跡がある。

#### ④平成元年度東円寺跡89-5区の調査

溝3条、古代の建物跡2棟、中世の建物跡3棟や土壌などを検出している。柱穴には平瓦を3枚重ねて根石にするようなものがあった。柱穴の根石として出土した唐草文軒平瓦片の瓦当は、2范知られている軒平瓦の瓦当の簡略化が進んだ方の約1/2が残存する個体で貴重であることから、町指定を受けている。

#### ⑤平成14年度東円寺跡02-2区・02-3区・02-5区の調査

この三つの調査区域で合わせて4棟の中世掘立柱建物群を検出した。このうち3つの調査区に跨って検出した建物SB2は南北4間以上、東西に6間ほどもある比較的大きな建物である。4棟の建物の柱の間隔は2.0mを上回る程度のものである。

### 建物群について

今回の東円寺跡09-1区の調査では、これまで周辺で検出されている中世の集落の一角を検出したことが成果である。

東円寺跡09-1区では、判明しているだけで7棟の建物が検出されている。そのうちSB1、

SB2、SB3の3棟は同一地点に建てられており、時代毎に建て替えが行われたことが推測されるものの、柱の間隔や方向、建物の規模などが、それぞれ異なる建物であったと考えられる。

SB1は南北3(5)間、東西2間で、柱間は南北2.5m、東西2.3mと格段に広く、柱穴の深さも40cm程度と、他の建物と比べて大きいのが特徴である。SB1は調査区内および過去に行なった近辺での調査で検出した掘立柱建物とは方向が異なるが、柱穴の規模が大きい割りに、2×3(5)間程度の単純な平面形態をもつ建物であることから、隣接地の87-1区で検出した奈良時代と考えられている建物SB-1、SB-2、SB-3のような倉庫的なものであったと考えられる。ただし今回検出したSB1については奈良時代の所産かどうかは不明である。

SB2は南北5間、東西4間程度の建物であるが、完全な長方形の建物ではなく、東面には建物の凹凸があったものと思われる。

いずれの掘立柱建物も火災などで焼失した形跡は観察できない。これに対して、発掘調査で出土する寺院に葺かれたと考えられる瓦類の大半は赤く焼けている。この調査地点で最も古い遺構と考え得る建物SB1にも焼けた形跡は見られない。このことから導き出されるることは、「東円寺」と称されるようになった寺院は、創建からそう遠くない時期に一気に焼失して、集落はその後に形成され、徐々に規模を拡大し、脈々と営まれ現在に至ったのではないかという從来からの見解である。

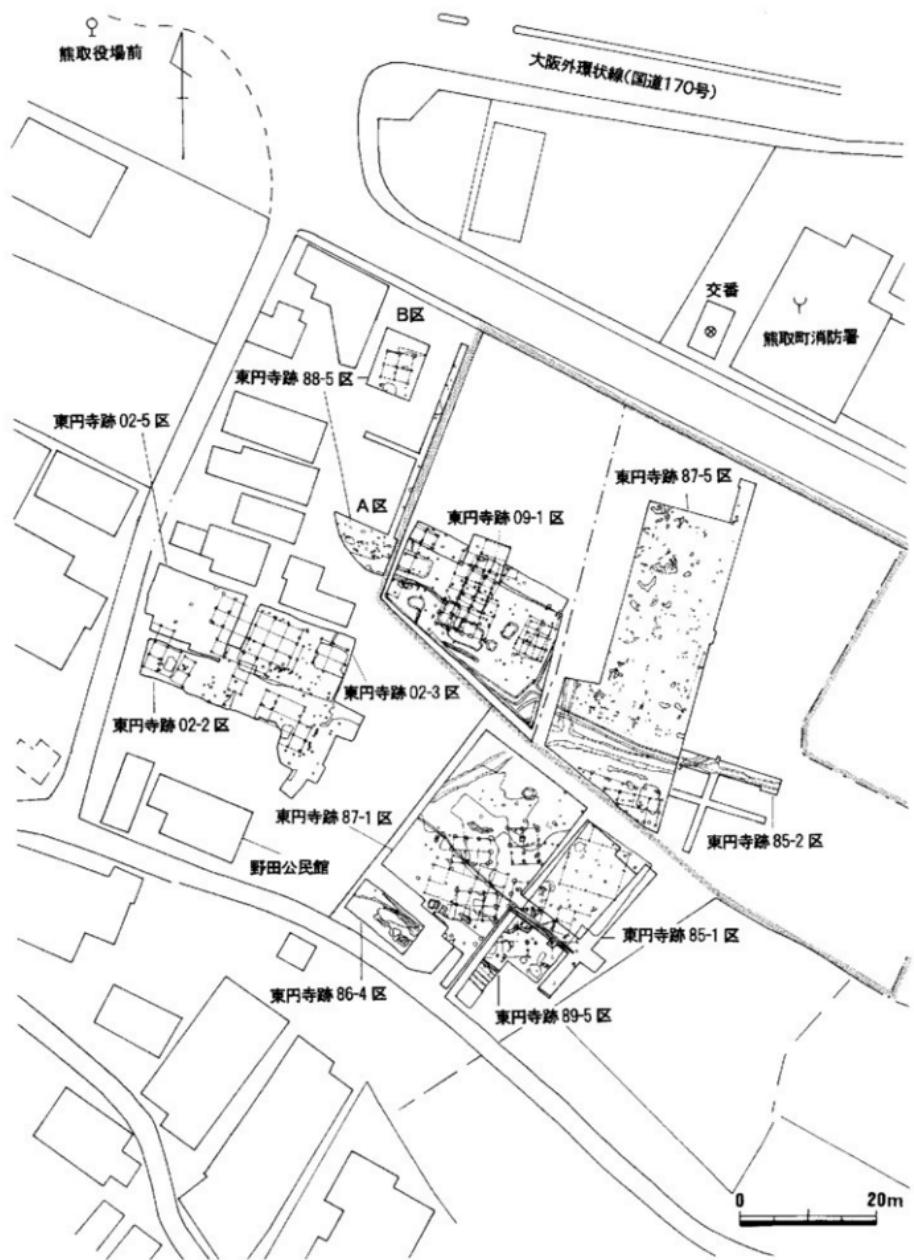
しかし、瓦や土器が焼けていて、検出面等遺構に焼けた痕跡が確認されなかったために、当地の寺院が焼失した後になって、掘立柱建物群が建てられたと安易に考えるのではなく、本来は存在していた焼け跡がその後の土地の造成で大きく削られてしまって、我々に判別できなくなっているのかも知れない。かねてより報告されていた寺院の瓦の柱穴への再利用についても、柱の抜き取り穴に瓦片が単純に転落しただけなのかも知れない。そうすると、掘立柱建物群は当地の寺院と同様に、14世紀代に焼失もしくは廃絶した可能性が考えられる。この地の中心的な寺院が、何らかの原因(戦乱等)で焼失したと同時に、集落も廃絶したと考える方がむしろ自然である。

また、今回の東円寺跡09-1区の発掘調査で検出した掘立柱建物の最も新しいものは14世紀代のものであり、江戸期に相当する建物は見られなかった。江戸期には礎石建物に転換していく、その後の建物の造成などで痕跡が失われたものと思われる。今回の調査では少量ではあるが、江戸期の陶磁器類や、大小の溝跡などを検出している。

検出された建物群の時期であるが、同時に検出される瓦器碗の破片を手掛かりにすると、いずれも13世紀の末期から14世紀初期の頃のものではないかと推測される。13世紀中期以前のものや、14世紀後半以降の遺物は少ないので、掘立柱建物の年代はこの時期と思われる。

建物群の性格であるが、SB1は短辺2間の長方形である単純な平面形態をもつことからも倉庫的な建物であったと考えられるものである。

SB2は凹凸のある5間×4間ほどの比較的大きな建物で、おそらく居住可能な施設だった



と考えられる。

SB3はおそらくSB1を撤去した後に建てられた建物で、間取りの単純さから倉庫的なものか、あるいは炊事や作業が行われた建物ではなかったかと考えられる。

SB4とSB5は建物の柱の方向と規模の小ささから、SB2やSB3らと同時に建てられた倉庫的な建物と考えられる。倉庫に関しては、その中に保管したものが何であったかは不明であるが、食器類の土器がまとまって廃棄されているような痕跡がないので、そういった道具類を納めたものではなく、後に痕跡を残さない農作物などを納めるものではなかったかと考えられる。炊事に関して、この調査区内では羽釜などの出土が比較的少なく、食物を煮炊きする炊事作業が行われていたことを示すものは少なかった。あるいは鍛冶作業などを行っていたことを示す焼けた遺構面なども検出されていない。

中世の掘立柱建物群については、南西側に位置する02-2区をはじめとする02-3区・02-5区で検出した建物群や、87-1区で検出したSB-5などと方向をほぼ同じくしている。これらの中世の建物同士の間には比較的幅員の広い溝跡があることがわかっており、これらの溝は近世ひいては現代まで再掘削されたり改修を受けるなどして面々と使用されてきたものであるが、かつてより一軒の世帯を区画するものであったと思われる。

また調査区の南西部分には、中世に掘削されて、近世にも再度開削されて使用していたと思われる溝群(SD3やSD4)が検出されており、それらは東円寺跡87-1区の調査区で検出した溝群と直接的に繋がるものであり、中世建物群の遺構を壊すような位置に開削されていないことから、開削された元来より中世建物群の周囲を廻って、建物群の所属関係(世帯)を画する性格を有していたものと考えられる。

出土遺物の破片点数は1468点で、前章の野田遺跡07-5区の9485点に比べると非常に少ないと言える。のことからわかるのは、この東円寺跡09-1区の調査地点は過去に地山面まで達する大きな削平を受けて、包含層や遺構面の本来の姿が壊されてしまい、そこについた多くの遺物も土砂とともにどこかへ運び去られてしまったことが考えられる。今回の調査で検出した柱穴や上墻・溝に関しては、元来比較的深さのあった遺構の下側部分を中心で検出したものと思われ、当時の生活面は既に失われているものと考えられる。

唐草文軒平瓦が3破片出土したが、いずれも火災による可能性が高い二次焼成を受けている。これまでの調査で検出した軒丸・軒平瓦の全てが二次的な焼成を受けていることから、これらの軒瓦を葺いた当初の建物はある時期に火災に遭い比較的短命に終わったものと考えられる。その時屋根に葺かれた瓦は落下して破碎し二度と瓦として屋根に上げられることはなかった。瓦の廃品の一部は、この付近の掘立柱建物を建てる際に、柱の老朽化を防ぐために柱穴の中に添えられるなど再利用される場合もあったのではないかと東円寺跡92-1区の調査の第19集には報告されている。しかし大部分の瓦片は、後世に土地を整理した際に、石など不要なものとともに溝や土壙や柱を抜き取った穴、あるいは窪地の中に落とし込まれてそのままとなったものと思われる。

写真図版 1



野田遺跡07-5区調査区 I-A区全景(南側から)

写真図版 2



野田遺跡07-5区調査区 I-A区全景(東側から)

写真図版 3



野田遺跡07-5区調査区Ⅰ-B区全景(北側から)

写真図版 4



野田遺跡07-5区調査区Ⅱ区全景(東側から)

写真図版 5



野田遺跡07-5区調査区Ⅲ区全景(南側から)

写真図版 6



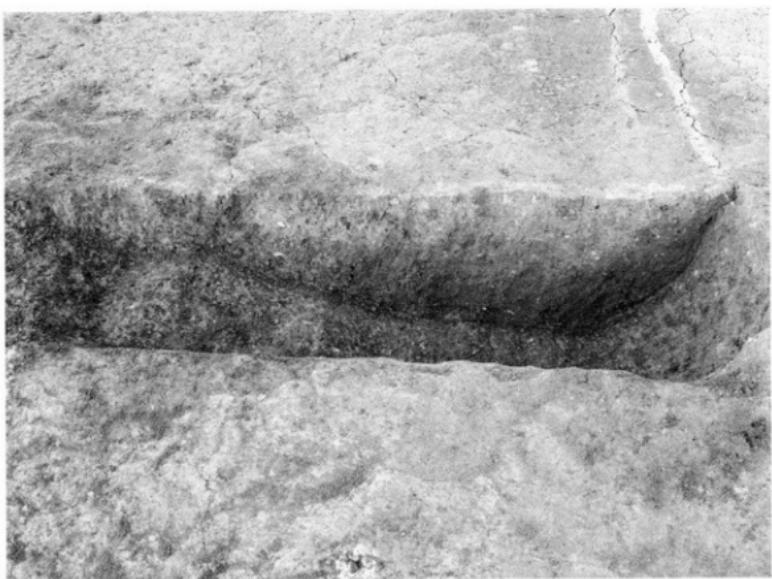
野田遺跡07-5区調査区Ⅰ-A区西壁面

写真図版  
7



野田遺跡07-5区調査区Ⅱ区西壁面

写真図版  
8



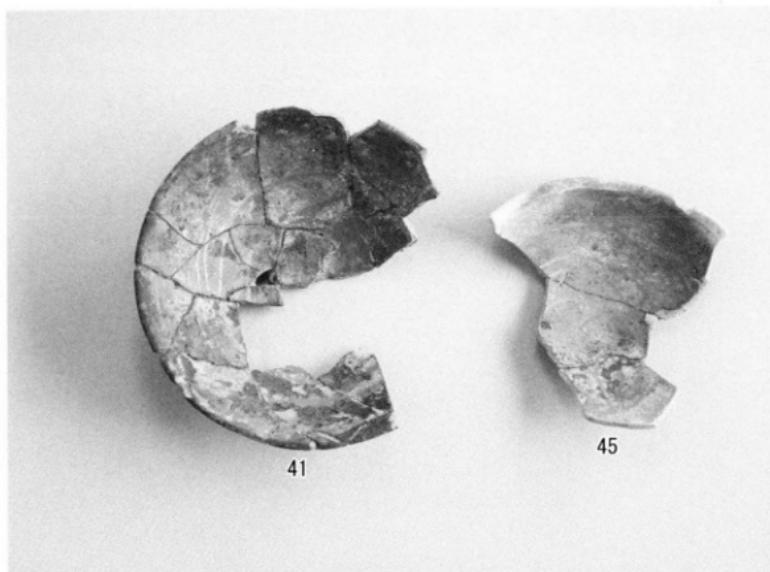
溝SD2断面(調査区Ⅰ-A区)



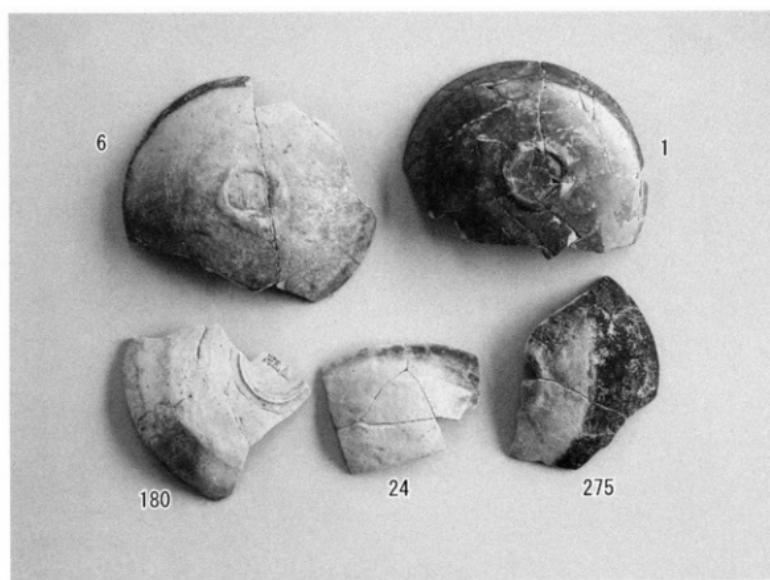
溝SD2 遺物出土状況(白磁と瓦器小皿など)



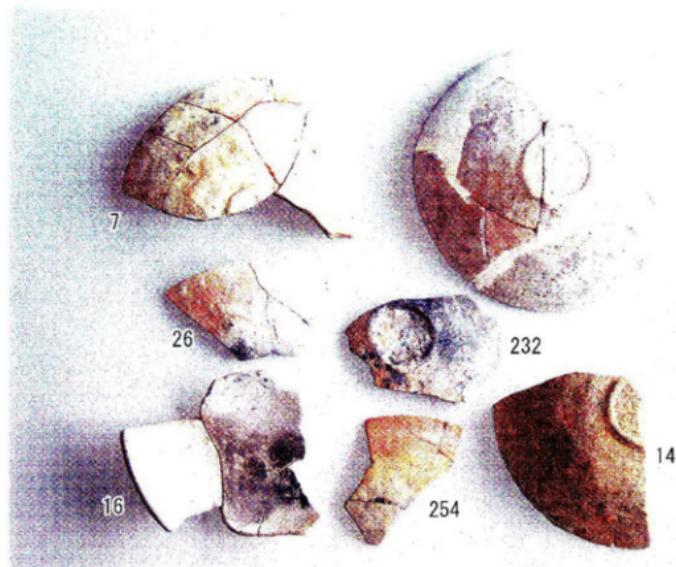
軒平瓦(130)



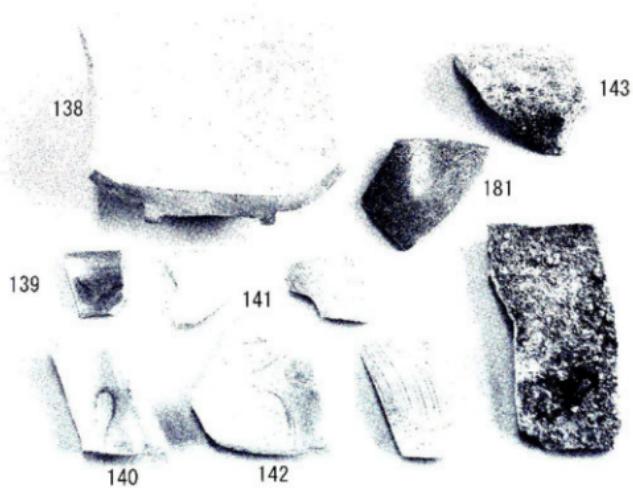
瓦器椀の暗文(野田遺跡07-5区)



瓦器椀類(野田遺跡07-5区)



焼けた瓦器椀(野田遺跡07-5区)



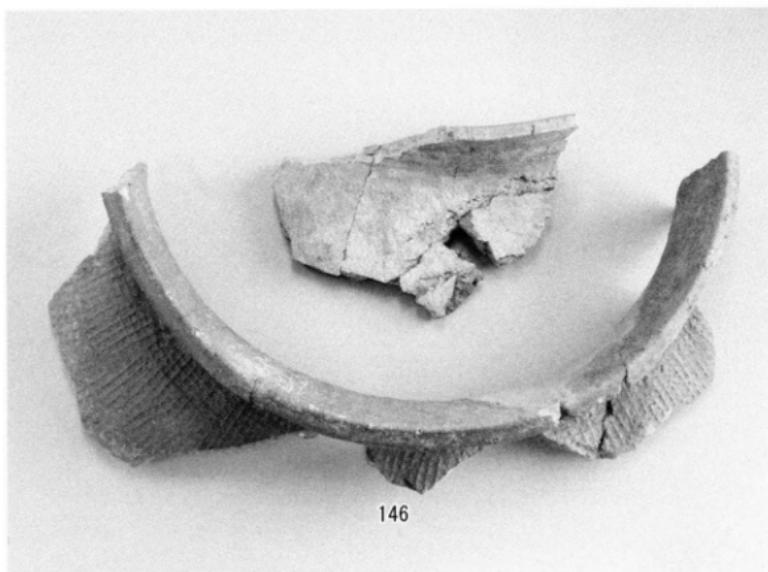
陶器(野田遺跡07-5区)

写真図版  
15

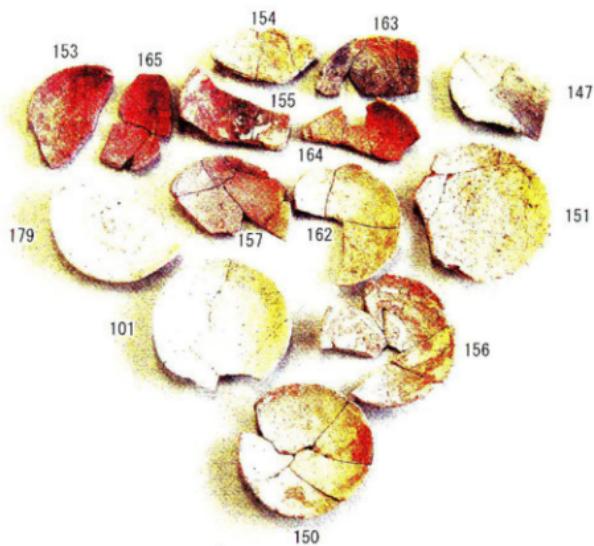


土師器羽釜(野田遺跡07-5区)

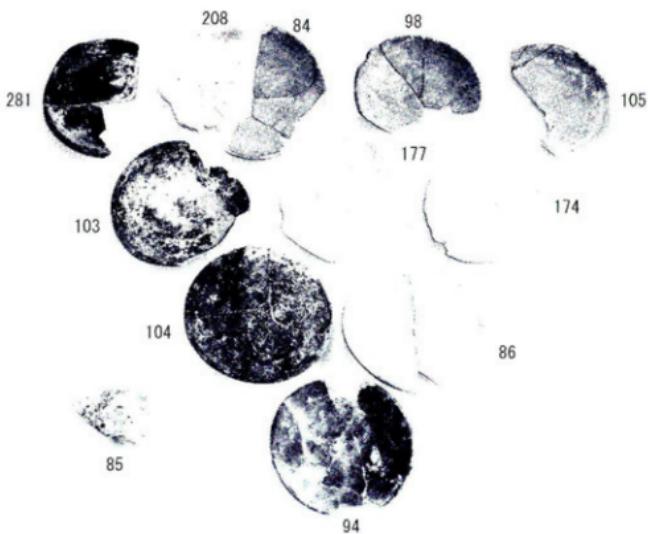
写真図版  
16



瓦質甕(野田遺跡07-5区)



焼けた小皿(野田遺跡07 5区)



瓦器小皿(野田遺跡07 5区)

写真図版  
19



東円寺跡09-1区遺構検出状況全景(東側から)

写真図版  
20



東円寺跡09-1区遺構検出状況全景(北側から)



土壌SK3検出状況(東側から)



土壌SK1検出状況(東側から)

写真図版  
23



土壤SK3と柱穴群の検出状況

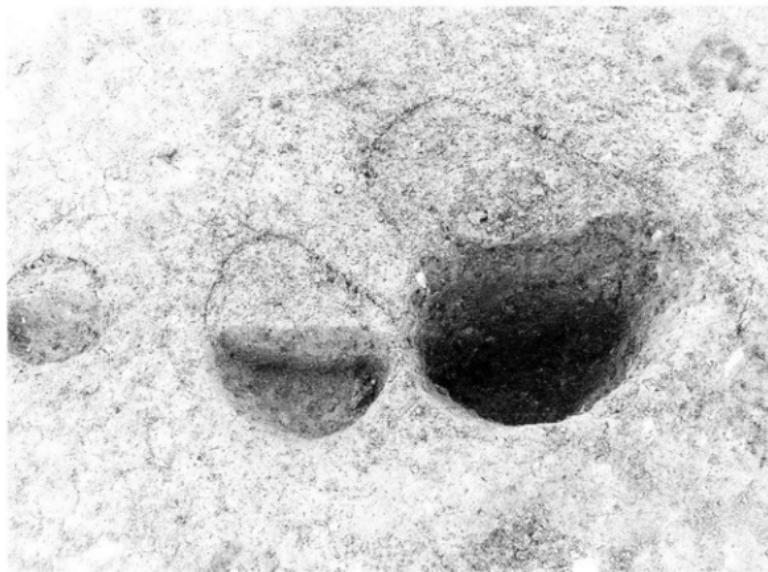
写真図版  
24



土壤SK6遺構掘削状況



土壤SK9と溝SD3・SD4の状況



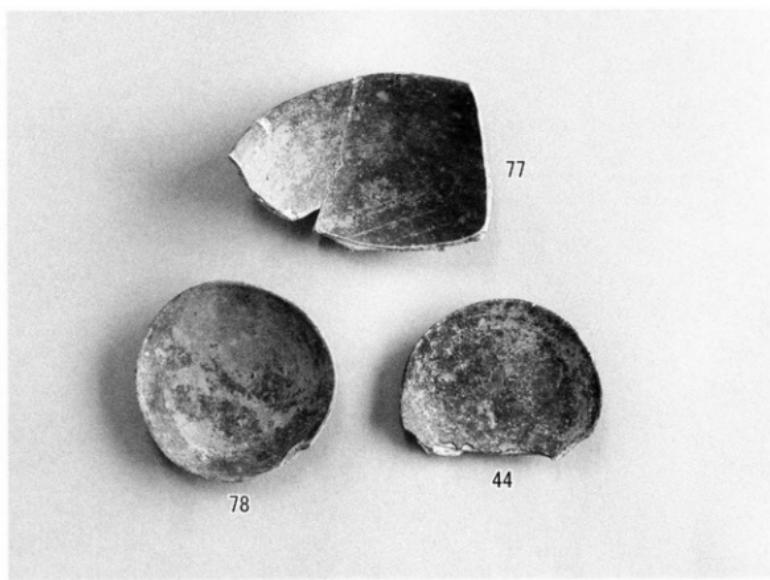
柱穴(SP61・SP62)の状況

写真図版  
27



柱穴SP51の遺物(瓦器小皿)出土状況

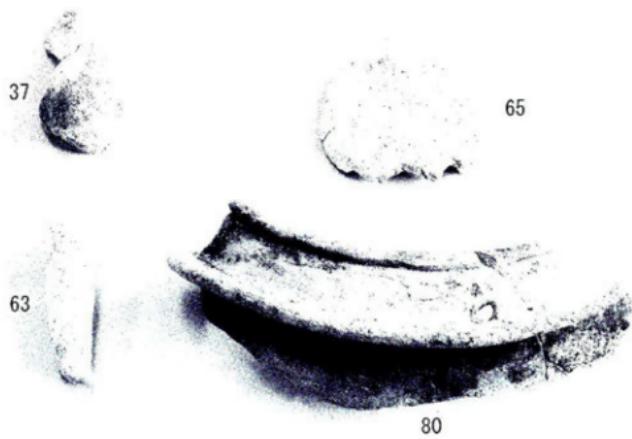
写真図版  
28



瓦器碗・小皿(東円寺跡09-1区)

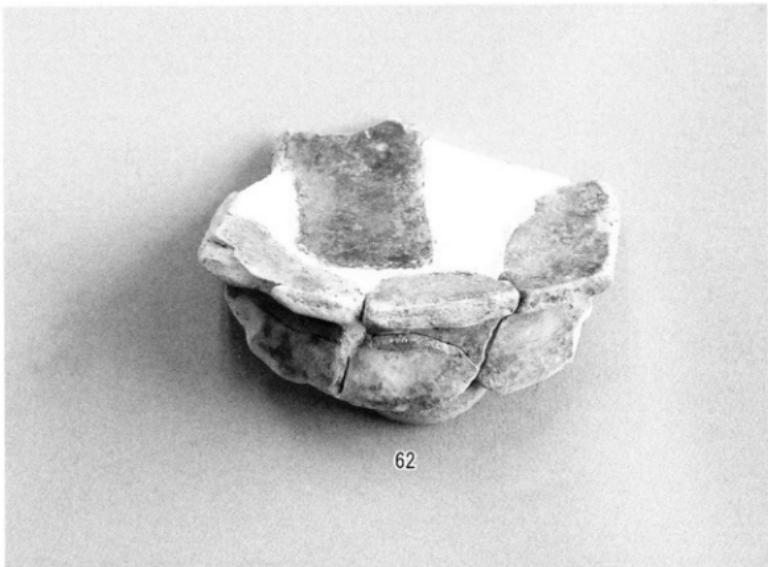


唐草文軒平瓦(東円寺跡09-1区)



施けた土器類(東円寺跡09-1区)

写真図版  
31



62

瓦質台付き鉢(東円寺跡09-1区)

写真図版  
32



64

陶磁器類(東円寺跡09-1区)

## 報告書抄録

ふりがな	のだいせきⅠ・とうえんじあとⅩはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	野田遺跡Ⅰ・東円寺跡Ⅹ発掘調査報告書							
卷次	野田遺跡Ⅰ・東円寺跡Ⅹ							
シリーズ名	熊取町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第50集							
編著者名	前川 淳							
編著機関	熊取町教育委員会							
所在地	〒590-0459 大阪府泉南郡熊取町野田一丁目1番1号							
発行年月日	西暦2010年10月							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯 ○° ′ ″	東経 ○° ′ ″	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因	
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
野田遺跡 07-5区	大阪府泉南郡 熊取町野田	27361	42	34° 23' 44"	135° 21' 39"	20070828 ～ 20071012	560	宅地造成
東円寺跡 09-1区	大阪府泉南郡 熊取町野田	27361	8	34° 23' 54"	135° 21' 23"	20090512 ～ 20090902	500	店舗建設
所収遺跡	種別	遺跡の主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
野田遺跡 07-5区	集落跡	縄文～近世	土壙・溝・柱穴		中世瓦器類・土 師器・陶磁器類			
東円寺跡 09-1区	寺院跡	平安～近世	土壙・溝・柱穴		中世瓦・瓦器・ 土師器・陶磁器類			

熊取町埋蔵文化財調査報告 第50集

野田遺跡I・東円寺跡XII発掘調査報告書

発行日 平成22年10月

発行・編集 熊取町教育委員会  
大阪府泉南郡熊取町野田一丁目1番1号

印刷 (有)山村印刷  
大阪府貝塚市近木1483 8